

# 翁方綱『蘇齋筆記』訳註(四)

西林昭一

## 要 旨

『跡見学園女子大学紀要』二十三号所載の拙稿「翁方綱『蘇齋筆記』訳註(三)を承け、本号では巻十四〈楷法〉一四条中、その後半の九条を訳註するものである。

## 凡 例

- ※ 各条には通し番号を附す。ただし、巻ごとに改めて「一」からおこす。
- ※ 原文には句読点を施し、訓下し文をそえ、語釈等を註記する。
- ※ 原文は正活字体で表記する。ただし底本の筆写にかかる別字は、一々を註記しない。
- ※ 訓下し文は、わが国での常用漢字を用い、また現代かなづかいとする。その際、書名には『』、作品名には任意にへんを附し、引用文は「」で括る。なお現代通行文において、かな書きを慣用とする漢字は、おおむねこれに従う。なお語幹のルビは、最少限にとどめて附す。
- ※ 註記は、各条の訓下し文の後に附す。その際、書法に関する用語および人名・作品を主として簡記し、その他の語は最少限にとどめる。なお註記中の引用文は、校勘にわたるものは原漢文、その他は訓下し文とするが、訓下し文では、できるだけ多く原漢字をとどめるものとする。

〔六〕綜論古今楷法。無過山谷三語。曰。大字莫若瘞鶴銘。小字莫作瘞  
凍蠅。樂毅論勝遺教經。此未言黃庭者。言樂毅則黃庭可知也。黃庭元祐  
秘閣真本。今尙未得見。王弇州云。世傳黃庭皆秘閣本。則今所見摹秘閣  
之本。亦皆具有典刑。如停雲館開卷所摹。卽秘閣本。其本今尙有舊拓存  
者。然秘閣真本。自應勝此。又董文敏所謂墨池爲之放光者。此則別是一  
本。棄捐搖俗作棄捐淫欲。以文義讀之。自必淫欲可通。閑暇無事修太平。  
作心太平。陸放翁取心太平以名庵。自必心字可通也。此雖舊本。然其書  
實在秘閣本下。吾豈敢執校讐以論書哉。所以黃庭。惟元祐秘閣本可憑。  
而秘閣本訖無眞者。長洲文氏。最精研小楷。其刻帖以此冠卷。是秘閣眞  
本。不得見於世久矣。其嗜異者。又獨推黃庭內景經。其實內景經眞本。  
無緒可原。非秘閣黃庭比也。惟有樂毅論元祐秘閣本。卽云罕見。而南宋  
越州學舍重開秘閣本。尙有舊拓存者。今惟長洲文氏停雲館帖內樂毅論全  
文本。實從越州學舍本出。不特形神畢肖。卽字裏微茫小泐損之勢。亦俱  
肖之。文氏鐫工之精至此。今講求小楷。必推停雲之樂毅全本。得存梁摹  
晉法於一綫。爲足珍也。此原石。今存嘉興馮氏。若其重刻停雲館本。則  
豪釐千里矣。

古今の楷法を綜論せるは、山谷の三語に過ぐるものなし。曰く、「大  
字は〈瘞鶴銘〉に若しくはなし。小字は瘞凍蠅を作す莫れ。〈樂毅論〉  
は〈遺經教〉に勝る」と。此に未だ黃庭を言わざるは、樂毅を言わば則  
ち黃庭は知るべければなり。黃庭の『元祐秘閣』の眞本は、今尙未  
だ見るを得ず。王弇州云う、「世に伝うる黃庭は、みな秘閣本なり」と。

則ち今 見るところの秘閣を摹するの本も、亦たみな典刑を具有す。『停  
雲館』の開卷 摹するところのごときは、即ち秘閣本なり。その本 今  
尙お旧拓の存するものあり。然れども秘閣の眞本は、自ら必にこれに勝  
るべし。又董文敏のいわゆる「墨池 これがために光を放つ」とせる  
ものは、これ則ち別のこれ一本なり。「棄捐搖俗」を「棄捐淫欲」に作る  
は、文義をもつてこれを読まば、自ら必ず「淫欲」も通すべし。「閑暇無  
事修太平」を「心太平」に作るは、陸放翁 心太平を取りもつて庵に  
名づくなれば、自ら必ず「心」字も通すべきなり。これ旧本なりと雖ど  
も、然れどもその書は実に秘閣本の下に在り。吾れ豈に敢て校讐を執り  
てもつて書を論ぜんや。所以に黃庭は、惟だ元祐秘閣本のみ憑るべし。  
しかして秘閣本は訖に眞なるものなし。長州の文氏は、最も小楷に精研  
たり。その刻帖これをもつて卷に冠せるは、是れ秘閣の眞本、世に見る  
を得ざること久しければなり。それ異を嗜むの者は、又に独り〈黃庭内  
景經〉を推すも、その実 内景經の眞本は、緒として原ぬべきなきこと、  
秘閣の黃庭の比にあらざるなり。惟だ〈樂毅論〉の元祐秘閣本のみ、即  
ち見る可く罕なりと云う。しかして南宋の〈越州学舎重開秘閣本〉には、  
尙お旧拓の存するものあり。今 惟うに、長州の文氏の停雲館帖内の樂  
毅論全文本は、実は越州学舎本従り出ず。特に形神 畢く肖るのみなら  
ず、即ち字裏の微茫なる小泐損の勢も、亦た俱にこれに肖たり。文氏の  
鐫工の精なる ここに至る。今 小楷を講求するものは、必ず停雲の樂  
毅全本を推す。梁摹の晋法を一線に存するを得れば、珍に足るとなすな  
り。この原石は、今 嘉興の馮氏に存す。その重刻停雲館本の若きは、

則ち「毫釐千里」なり。

(431) 山谷三語 山谷は黃庭堅（註は本卷「七」項にゆずる）の号。三語という「大字遺教經」の二一字は、『山谷題跋』卷四「題梁毅論」に、語順はちがうがほぼ同文でみえる。

(432) 瘞鶴銘 江蘇省鎮江市の東北、楊子江際の高さ一五〇m周囲二kmほどの焦山山中の定慧寺境内にある「焦山碑刻」（一名「墨宝軒碑廊」）中の一として現存する。もとは流れに臨む崖壁に刻されていたが、いつの頃か雷で崩れて水中に沈み、北宋代には、湯水期でなければ採拓できなかったのを、南宋の淳熙年間（一一七四—八九）に原石を引き上げた。しかしまたいつしか江中に墜ちた。清の康熙五三年（一七一四）に知県の陳鵬年が残石五塊を引き上げさせ、焦山の觀音庵の壁に嵌めて残したのが原存の瘞鶴銘で、『金石萃編』によれば、約一八八×一七〇cm、一二行、行ごとに二三〜二五字。もと全文で一九一字を右行で入れていた。長く水中にあつたり、また度重なる採拓のために磨損し、旧拓でも補刻の箇所がみえる。

この行書味がかつた大字の楷書は、南朝において作例の少ないこともあるが、むしろ中国人の好尚に適うせいも、北宋以来、古刻の名蹟と称えられ、歐陽脩『集古錄跋尾』をはじめ枚挙に遑ない著録がある。就中、清の汪士鋐『瘞鶴銘考』不分卷は、従来の説を集大成して一々に自説を加え、翁方綱『瘞鶴銘補考』一卷（光緒三四年、端方・繆荃孫精刻本）は、前人の所説を批判しながら存字に精密な考証を加えた出色のものである。

書者と年代については、文中に「華陽真逸撰」、「甲午歲」とあることから、南宋の黃伯思はその『東觀余論』卷下「跋瘞鶴銘後」で、梁の陶弘景が天監一三年（五一四）に撰書したものとみて以来、この説に従う人が多い。しかし「上皇山樵書」とあることなどを含め、王羲之の書（『集古錄跋尾』引唐・孫処元『潤州函經』の説）とする見解をはじめ、隋人、唐の顧況、皮日休、顏真卿に比定する説などがあって、定説はない。

瘞鶴銘に親炙して一家を成したのが黃庭堅で、かれの「大字無過瘞鶴銘」の一語は、人口に膾炙している。また『山谷題跋』卷四「題瘞鶴銘後」に「右軍、嘗て戯に竜爪書を為る。今復た見ず。余、瘞鶴銘を觀るに、勢

飛動するが如し。豈に其の遺法なる邪。云々」といい、註(431)引用の「書遺教經後」にもみえるように、王羲之の書と信じて推重している。ちなみに翁方綱は前掲書で、王羲之と確定する証拠はないが、王羲之の書とみることも書法上、首肯できなくはない、といっている。

この碑に対する評は、たとえば黃伯思が「蕭遠淡雅、其の人と為りの若し」（前掲書）といい、曹士冕が「筆法の妙は書家の冠冕為り」（『法帖譜系』）というように、有名な楷書作であるため、南宋以来の翻刻本も多い。王壯弘氏は、重刻本九種を挙げている。

(433) 癡凍蠅 寒さで動きの鈍くなった蠅で、ここは小字におこりがちな動きのない筆勢を戒める意。『佩文韻府』には黃庭堅の詩中「癡甚霜前蠅」の一句とともに、ここを出典としてこの語が引かれている。黃庭堅の造語であらうか。

(434) 遺教經 一名、仏遺教經といい、王羲之の小楷として『墨池堂選帖』卷一、『玉煙堂帖』卷七、『懋勳殿法帖』卷六（未見）などに刻入されている。ただし『集古錄跋尾』卷一〇では「相伝えて王羲之の書と云うは誤り也。蓋し唐世の写經手の書する所ならん。云々」といい、趙明誠『金石錄』卷三〇は歐陽脩に左袒して「唐遺教經」と題し、董道『広川書跋』卷八には一歩を進め、唐の穆宗の時の人である比丘道秀の書であるという。なお帖末にある「永和十二年六月旦日、山陰王羲之書」は偽款であらう。

黃庭堅は『山谷題跋』卷四「跋翟公巽所藏石刻」に「遺教經は姚秦の弘始四年（四〇二）に訳さる。王右軍没後の數年に在り。（中略）今、長安の雷氏家の遺教經、石上の行書は、貞觀中、遺教經を行なわしむるの敕あり、善書せる經生の書本を扱びて焉を頒た令む。敕と經の字は是れ一手なり。但だ真・行異なる耳。余、平生遺教は右軍に非るを疑う。比來攷尋し、遂に決して定らず右軍の書に非るを知る矣」といい、また「書遺教經後」にも「仏遺教經一卷は何の世の何人の書なるやを知らず。或ひと曰く、右軍羲之の書と。黃庭堅曰く、吾、嘗て此の書を評す。楷法中に在りて、小は梁毅論に及ばざる爾（のみ）なるも、清勁方重は、蓋し蕭子雲等を超越すること數等なりと。頃（このごろ）京口の断崖中に瘞鶴銘の大字を見る。右軍の書なり。其の勝処は乃ち名貌す可からず。此れを以て之を觀るに、良に右軍の筆画

に非ず。瘞鶴銘の若きは、断じて右軍の書となす。端(まこと)に人をして疑わざら使む。云々」といつている。

(435) 黄庭元祐秘閣真本 『元祐秘閣統帖』は、註(368)前出。ここに収載とみられる黄庭経の零本に文明書局影印本があるというが、未見。

(436) 王弇州 弇州は王世貞(一五二六—九〇)の号。字は元美、別号は鳳州。江蘇省太倉の人。嘉靖二十六年(一五四七)、一九歳で進士となり、官は刑部尚書に至った。博学で李攀龍と古文辞を唱導し、長く文壇に君臨した。書画碑帖の収蔵に富み、鑑蔵家としても著名であるが、ことに書画に関する多くの論考を著した。『弇州山人四部稿』へ墨蹟跋・へ墨刻跋、また『芸苑卮言』、『弇州山人統考』へ墨蹟跋・へ墨刻跋に収録されている。伝は『明史』巻二八七、『陳眉公全集』巻三一「墓誌銘」、『明詩綜』巻四六、『明詩紀事』己巻一、『列朝詩集小伝』丁巻上、姜公翰「王弇州的生平与著述」(『国立台湾大学文史叢刊』)などがある。

なお下句の「世伝黄庭、皆秘閣本」は、上述の論考には見当たらない。後放に俟つ。

(437) 董文敏 文敏は董其昌(注(389)前出)の諡。

(438) 墨池為之放光 趙孟頫旧蔵・現在玄美庵秘笈黄庭経のいわゆる七字成文へ心太平本の董其昌第一跋中にみえる語。

(439) 葉捐揺俗作葉捐滂欲 前句は黄庭経のいわゆる四字成文本、後句は七字成文本をさす。第一四行目。

(440) 閑暇無事修太平作心太平 同じく第一六行目の句の異同をいう。

(441) 陸放翁取心太平以名庵 放翁は陸游(註(383)前出)の号。心太平を齋号としたことについては、心太平本の呉雲の跋にもみえる。

(442) 長州文氏 通常、文徵明と子の彭文嘉(註(400)前出)の総称であるが、下句からみここでは文徵明(一四七〇—一五五九)をさす。初名は璧、字を徵明といつたが、のちに名を徵明、字を徵仲とした。号は衡山、齋号を玉磬山房、停雲館という。また官名により文待詔と称された。江蘇省蘇州の人。科挙試には中らず、嘉靖二年(一五二二)、翰林待詔に推挙されたが官界になじめず、三ヶ年で官を去り帰省した。温厚篤美、清廉潔白の道徳家で、しかも刻苦精勵し、詩文書画篆刻ともに善くした。九〇歳の長寿を全うし、沈

周の後を継ぐ蘇州芸苑の領袖となり、歿後も長らく書画の師表と仰がれた。が、若い頃は悪筆であった。はじめは宋・元の書を学んだが、ことに趙孟頫を模範としてその筆意を会得し、のち晋・唐の書を学んだ。各体の書を能くしているが、ことに黄庭経・楽毅論にもとづく端麗な小楷に長じた。最晩年に至るまで蠅頭書にも堪能で、『醉翁亭記』へ離騷・九歌にその一斑がうかがえる。また書画の鑑蔵においても名があり、『停雲館法帖』(註(372)前出)を刊刻した。詩文集に『甫田集』三六巻がある。伝は『明史』巻二八七、『甫田集』巻三六(行略)、『姑蘇名賢後紀』(墓誌銘・伝)、『明詩綜』巻三八、『明詩紀事』丁巻一一、『列朝詩集小伝』丙、『無声詩史』巻二、『広印人伝』巻五、江兆申『文徵明画系年』、内山知也『文徵明の生涯と芸術』(『筑波大学文学言語研究(文芸篇)』六)その他がある。

(443) 黄庭内景経 また太上黄庭内景玉経という。これを王羲之の書としている刻帖に『臨江戲魚堂帖』第五、『東書堂集古帖』第三、『経訓堂帖』第一がある。が、『戲鴻堂法書』巻一、『鬱岡齋帖』第二、『玉煙堂帖』巻四、『玉虹鑑真帖』第二らは、東晋の楊羲(三三〇—三八七)字は羲和と題している。また『鬱岡齋帖』本に跋する王肯堂は「右の黄素黄庭経は、呉郡の韓敬堂先生蔵する所にして、屢しば出して以て予に示す。陶穀と米芾の跋と皆に之れ無し。想うに宣和御府重装のとき之を去る矣。徽宗は題して右軍の書と為し、米氏の『書史』には、以為らく『是れ六朝人の書にして、唐人の気格無し』云々」といつたあと、『眞誥』を引いて考証し、この黄素黄庭内景経は、許穆の子で楊羲に師事した許掾の書であるという。ちなみに王肯堂がいう徽宗の題字本に拠ったと思われる内景経に『王羲之書蹟大系』巻二所収がある。また王肯堂は米芾の『書史』を引くが、原文には「黄素黄庭経、云々」とはいうものの、黄庭外景経を意味するものようでもあり、必ずしも内景経と断定はできない。また『壯陶閣帖』第三には「唐人黄庭内景経」を刻入している。『経訓堂法書』を考証する張伯英は「第一帖の黄庭内景経は、他刻に異なる。絳雲楼蔵する所の者を以て最と為す。今天津の徐氏に在り。次いで鬱岡齋と戲鴻とに摘摹の敷衍にして、同じく一本に出ず。墨迹は清の内府に帰す。此の種の筆致は稍や弱く、書体も亦た宋以前に在らず。凡そ古書の著名の迹は、則ち臨仿のもの一本に止まらず。其の精雅なる者は、自ら存

儲す可し。若し楊(義)・許(掾)の手書と云わば、恐らくは宋刻も亦た未だ必ずしも信ず可からざる耳」といつている。以上を要するに、現存する刻帖では、王羲之、楊羲、許掾、唐人いずれも決め手はない。むしろ北宋以後のものと思われる。

(444) 停雲館帖内楽毅論全文本 『停雲館帖』巻一には、全文本と断欠本の二本を収めているが、その全文本をさす。それには末行款記が「永和四年十二年廿四」の紀年だけで「付官奴」の語はない。楽毅論全般については註(362)前出。

(445) 文氏鑄工『叢帖目』一に引く趙宦光『寒山金石林部目』に「余が家、近ごろ停雲館法帖の貞珉を蔵す。乃ち文待詔先生、之が為に冰鑿し、国博(文彭)・和州(文嘉)両先生、之が為に手勅し、温恕・吳璵・章簡甫の三名人之が為に手刻す。鏤に工を計らず、惟だ期にのみ志を満し、完には日を論ぜず、第だ精粗を較ぶるのみ。凡そ此の諸公、毎に真蹟古搨を搨し、月を弥り年を窮むるに非ざれば、軽がるしくは摹拓せず。最後は一十二巻を得るに止まる。云々」とあり、温・吳・章三人の名手の鑄刻であることをいう。ただし孫承沢『問者軒帖考』には「当日、衡山先生父子、自ら撫し自ら刻す。而して又に門客の温恕・章簡父有り、之が為に周旋し、尚お遺憾有り。此くの如くなれば則ち、摹帖、豈に事に易からん乎」といい、温・章の刻が一等を下しているとみるが、文氏に対する思い入れの深さによる誤認である。

(446) 嘉興馮氏 嘉興は浙江省嘉興県をさすが、この馮氏を特定できない。『叢帖目』一には、張伯英の跋を引いて「石は乾隆の時、嘗つて畢氏に帰し、転じて馮氏に帰す。其の中、已に配補多く、後遂に散佚す」といい、また容庚は、典拠を明示していないが、文氏の後、この原石が寒山の趙氏(趙宦光)、武進の劉氏、常熟の錢氏、鎮洋の畢氏、桐鄉(安徽省桐城縣)の馮氏を通伝したといっている。

(447) 重刻停雲館本 このこと註(372)に少しく触れた。『叢帖目』一に引く張伯英の跋に「王澐曰く、初刻は只だ四巻のみにして、巻首に標題して小字を為す。後、増して十巻に至り、改巻して書を分つ。又、増して十二巻に至る。同時に即ち翻本有り。清初に至りて翻する者益ます多し。然れども原刻は精彩独り異りて、識者、自ら一望して知る可しと。(中略)今、完帙已に

多くは有らず。蔵せる者は往々にして皆に覆本なり」といつているが、ここにいう王澐の典拠を検索しえない。

(448) 豪釐千里 豪は毫の仮借。『史記』太史公自序に「之を毫釐に失なわば、差千里を以つてす」を踏まえ、ここでは停雲館帖の重刻本は、原刻の形意を把えきれないことをいう。

(七) 綜論唐楷。則趙子固所學三碑。曰廟堂化度九成也。蓋由晉楷遞推之。則永興直接右軍。寶息述書賦注。言右軍正書唐世稀絶。自必以廟堂碑接晉楷矣。今世止見五代王彥超重刻之陝本。純用圓彎之勢。學者每憾永興用筆無自追尋。城武石本亦宋時所刻。專取清勁。而又多嫌枯窘。益難尋其蹤矣。及見唐刻原本。乃知。陝本太過用圓。實不及城武之清勁者。尚存其原本之什一。昔人見唐本者。謂其方穩近歐書。然歐書險峙。又不若虞書之凝遠淵穆。能傳晉楷神韻也。若以虞與歐對言之。究竟歐方虞圓。則唐楷自必以廟堂碑爲第一也。然而通徹唐之書家。通徹晉唐之書脈。至於歐陽率更。似是純用方者。而惟一化度碑。其風神即在凝鍊中。此則合於歐陽正脈。一以貫之。恐虞書在唐時繼往開來。初瞻風度。仍當以率更化度銘。爲唐楷第一。而廟堂九成。皆由唐問晉之正宗也。再求其次。則褚之孟法師歐之虞恭公碑。是二種可以肩亞耳。若張長史郎官記最著稱。特以長史擅草法。故論者必推重其楷耳。若竟儕諸廟堂孟法師間。則未敢信。

唐楷を綜論すれば、則ち趙子固挙ぐるところの三碑の、廟堂・化度・九成を曰うなり。蓋し晉楷より通りてこれを推せば、則ち永興は右軍に直接す。寶息『述書賦』の注に、「右軍の正書は、唐の世稀絶たり」と

言うは、自ら必ず「廟堂碑」をもって晋楷を接がしむなり。今の世止だ五代の王彦超重刻の「陝本」の、純ら用って円彎の勢を見るのみ。学ぶ者は毎に永興の用筆自ら追ひ尋ぬなきを憾む。「城武石本」も亦た宋時の刻するところにして、専ら清勁を取れども、又にも多く枯窘を嫌む。益ますその蹤を尋ねがたし。唐刻の原本を見るに及び、乃ち知る、陝本は太だ円を用うるに過ぎ、実に城武の清勁なるものに及ばずして、尚おその原本の仕の一を存するを。昔人の唐本を見る者は、その方穩欧書に近しと謂う。然れども欧書は險峙たり。又にも虞書の凝遠淵穆にして、能く晋楷の神韻を伝うるに若かざるなり。若し虞と欧とをもってこれを対言すれば、究竟欧は方虞は円なり。則ち唐楷は自ら必ず廟堂碑をもって第一となすなり。然りしこうして唐の書家を通徹し、晋・唐の書脈を通徹す。歐陽率更に至りては、是れ純ら方を用いるものに似たれども、惟だ一の化度碑のみは、その風神即ち凝鍊中に在り。これ則ち晋・唐の正脈に合し、「一もってこれを貫く」なり。恐らく虞の書は、唐の時時に在りて往を継ぎ来を開き、初めて風度を瞻るならんも、仍お当に率更の「化度銘」をもって、唐楷の第一となすべし。しかして「廟堂」・「九成」は、みな唐より晋の正宗を問うものなり。再びその次を求むれば、則ち褚の「孟法師」、欧の「虞恭公碑」なり。是の二種はもって肩並すべきのみ。張長史の「郎官記」の若きは最も著称せらるも、特だ長史は草法を擅にせるをもつての故に、論者は必ずその楷を推重せるのみ。若し竟に諸を「廟堂」・「孟法師」の間に儕ぶれば、則ち未だ敢ては信ぜざるなり。

(49) 趙子固 子固は、南宋末の趙孟堅(一一九九—一二六四?)の字。号は彝齋。諡は文簡。浙江省海塩の人。宋の太祖の二男・燕王德昭の末裔で、趙孟頫と同族同世代である。宝慶二年(一二二六)の進士。官は贛州太守に至った。博学で詩文書画にすぐれた。ことにその画によって、琴の楊嗣翁、碁の趙中父、書の張即之と四絶に教えられるが、最も水仙画を得意とした。金石書画の收藏に富み、漫遊するときには舟中にも愛玩品を携えた風流は、時人に米芾の「書画舫」に擬せられ、「趙孟堅の「書画船」とよばれた。姜夔旧蔵の「五字不損本武蘭亭序」を翁松から入手したが、帰途舟で舟山にさしかかったおり、突風で転覆した。このとき所持品を失ったが、蘭亭序だけは救いあげ「性命可軽、至宝是保」と題したという、いわゆる「落水本蘭亭序」の故事(周密「齊東野語」卷一九ほか)は、ことに有名である。その書は魏の鍾繇に私淑したという。文集に「彝齋文編」がある。書論に「論書」一卷があるが、下文の一句は、この「(前略)然らば則ち従りて道に入らんと欲すれば、楷に於て何くにか従わん。曰く、僅かに三有り焉。化度・九成・廟堂のみ。(中略)今、楷書法を求むるに、此の三者を舍つれば、是れ南轅して北轍せん矣。云々」というのに拠っている。

伝は「南宋書」卷一八、「宋史翼」卷二九、「図絵宝鑑」卷四、「宋人軼事彙編」卷一九、翁同文「画人生卒年攷(下)」(「故宮季刊」四—三)、福本雅一「論書」(「中国書論大系」六)。

(450) 廟堂 虞世南の孔子廟堂碑をさす。註(138)前出。

(451) 化度 歐陽詢書「化度寺邕禪師舍利塔銘」をさす。通称を化度寺碑という。この原石は、唐代すでに三断石となっていたらしいが、北宋の慶曆(一〇四一—四八年)の初めには存在し、范雍という人が発見し、その范氏賜書楼に置いたが、靖康の乱(一一二七年)後に好事家が数十本を拓出したあと破砕してしまったと伝える(解縉「春雨集」「化度寺碑跋」)。原石拓の尺寸を記録するものはないが、翁方綱が嘉慶五年(一八〇〇)に復元を試みた「化度寺碑全図」によれば、もとは三四行、満行三三字、全文で一〇八九字を入れたものである。銘文の部位は約七五×八〇cm。ほぼ方形の形制から推して、塔の基壇に嵌めたものであろう。三階教の高僧である邕禪師(五四三—六三一年)が入寂して、長安郊外の終南山山麓の鷓鳴阜にある信行禪師靈

塔の左側に建てた舍利塔銘として刻されたもので、銘文は文章家として名のある李百薬の撰。欧陽詢七五歳時の書である。

化度寺碑は、欧陽詢の楷書の名品として早くから鑑賞されたりしく、この唐拓本が今世紀の初頭に、敦煌莫高窟第一七のいわゆる「藏経洞」に収められていた古文書類にまじり、台紙の表裏に貼った剪装本の形で発見された。

いまパリ国立図書館（ペリオ収集、一紙二頁分）と、大英博物館・図書館（スタイン収集、五紙一〇頁分）に分蔵されているが、これは原石の初行から八行目の半ばにあたる合計二二三六字の零本である。なおこの八行半分は、ところどころで計三五字が欠失していることから、唐代すでに原石が断裂していたと考えられる。北宋末以来、数多くの翻刻本が出ているが、それら伝本の優劣については多くの議論がある。ことに王孟楊本（孟楊は明初の王偁の字）は、敦煌本の出現によって、原石拓と認められた。現在、上海図書館に蔵されているが、影印本として手近には『中国法書選30』（二支社刊）がある。宋代の翻刻本では翁方綱旧蔵本が著名で、大谷大学図書館に現蔵されており、（請求番号外乙8）、『宋拓墨宝二種』の一として印行されている。

欧陽詢の楷書碑のうち、とりわけ化度寺碑と九成宮碑の優劣論は早くから取沙汰されている。そのもっとも早いのは、明の都逢慶『書画題跋』巻二に引く「化度寺碑陳彦廉本十三跋」に附される明の宋謙の跋にみえる「姜堯章謂う、（化度は九成宮）醴泉に勝り、曩々として神品に入ると」という南宋の姜夔の評である。ついで本項にいう趙孟堅。その後、元代では趙孟頫（陳彦廉本十三跋の第二）、袁桷（『清容居士集』巻七七）、明代では王世貞（『弇州山人統稿』巻一六六）、清初では孫承沢（『庚子銷夏記』巻六）、楊賓（『大瓢偶筆』巻四）などが、化度寺碑を第一に推している。ただ清の王澐は「醴泉銘・化度寺碑は、皆に率更晩年の合作なり。醴泉は朗暢、化度は逸逸。正に東の岱、西の華の軒軽す可からざるが如し。評者、化度の醴泉に勝ると目せるは篤論に非ざる也。云々」（『虚舟題跋』巻七「化度寺邕禪師塔銘」とい、また「醴泉銘は）尤も率更晩年の経意の作にして、寛裕明秀なり。故に正に邕禪師塔銘の上に在るべし。云々」（同右「九成宮醴泉銘」といって、旧来の見解に反駁したことでまた論議をよんだ。就中、翁方綱は王澐の見解を真向から斥けた「化度勝醴泉論」を著しているように、化度寺碑の研

究に畢生の力を尽している。ただし化度寺碑については、『孔子廟堂碑考』のような単著はない。がその所蔵本の帖の内外に書きこまれた約一五〇項にのぼる題識は、一著述に匹敵する内容をそなえている。また『蘇齋題跋』巻上「弁化度寺書」に考証があり、さらに『復初齋文集』巻二二には、長文の「化度寺邕禪師塔銘跋二首」があるほか、さらに四跋を加え、極めて精審な考証を展開しており、またその『蘇齋唐碑選』には、化度寺碑、孔子廟堂碑、九成宮碑の順に挙げて、〈張長史郎官石記〉の項に「之を要するに唐楷は化度を以て第一と為す」と品等づけしている。

ちなみに中田勇次郎氏の「化度寺碑の伝承」（『書品』40号）は、詳細な論考であるうえ、翁方綱の「化度寺碑全図」を補訂する碑式と註が附されている。

(452) 九成 欧陽詢書（九成宮醴泉銘）をさす。通称で九成宮碑といいた、醴泉銘という。原碑はいまも陝西省麟游県城の西郊二・五km、天台山中の九成宮趾にある。約一七四×八五cm。円首は深彫りの双竜で飾り、圭首形の題額は陽文の篆書二行で「九成宮醴泉銘」と入れている。碑文は二四行、満行四九字、全文で一〇九字。貞観六年（六三二）、太宗が離宮であるこの九成宮に避暑し散策しており、西方の一隅で泉を探りあて、これを瑞祥として記念碑を建てさせたのが、この碑で、撰文は貞観の治の功臣で文章に長じた魏徵（五八〇～六四三年）の駢麗体、欧陽詢七六歳時の書である。なお左右両側に宋人の観題が刻されている。欧陽詢の書のうち、九成宮碑はもっとも著名であったから、長期間にわたる採拓のため、文字が磨損しまた点画が瘦せた。そこを研磨して補刻を加えたりしているため、いまは原蹟の見るかげもない。が、この宋拓を目にした者は、奇しく楷法の極則として重んじた。これを称揚すること、宋の釈居簡『北磻集』以来、枚挙に暇ないが、例えば王世貞は「（欧陽詢の楷書は）太はだ瘦儉に傷ありて、古法小変せるも、独り醴泉銘のみは、遒勁の中、婉潤を失わず。尤も合作為り。云々」という（『芸苑卮言』巻一三五）のが、ほぼ評家を代表する語であろう。翁方綱も化度寺碑を第一に推すものの、九成宮碑を貶しめてはいない。前註に触れた『蘇齋唐碑選』には、唐楷の第三におき、また『復初齋文集』巻三二には三跋をとどめており、その第一跋に「（前略）惟だ醴泉のみは前半は遒勁、後半は寛和に

して、諸碑、前は舒し後は歛なる者とは同じからず。豈に奉勅の書の表瑞の爲めにして作れるを以てか、抑そも字勢の稍や大なるを以ての故に、歛に帰せずして舒に帰せる歟。之を要するに、其の結体を合し、其の章法を権れば、是れ率更の平生、特に匠意を出すの構、千門万户、規矩方員(円)の至れる者なり矣。斯ち諸家を範圍し百代に程式する所以也。云々」と評し、また第二跋には王澐は生涯、歐陽詢を習ったが、その真髓を学び得ていないことを指摘したりえて「歐書は円渾の筆を以て情性を爲し、而して方整の筆を以て形貌を爲す。其の淳古の処は、乃ち直ちに篆隸を根柢にす。斯の(醴泉)銘を觀る者は、必ず此の義を知り、然る後に得と爲す耳。云々」と自得の見解を披瀝している。

翁方綱は九成宮碑の宋拓本を二〇余種みたという(前掲書第三跋)が、重刻本もまた多い。例えば楊守敬は「是の碑は宋自り以来、人寰に烜赫たり。今日、一真本を得るに千金を議す。碑帖の估、此れより重き者無し。然れども重刻なる者も亦た無慮数十百本なり。其の著名なる者は、南宋の榷場本、明時の金氏本、万曆内府本、国朝の無錫の秦氏本なり。云々」といい(『平碑記』卷三)、翻刻では秦氏本を推している。

宋拓本としては従来、端方旧藏三井本が重んぜられてきたが、近年、明の李祺旧藏で北京・故宫博物院蔵の『宋搨九成宮醴泉銘』(文物出版社刊、また二玄社「原色法帖選(2)」)が世に出て、伝存の最旧拓本と認められている。翁方綱のいわゆる「円渾の筆を以て情性を爲し、方整の筆を以て形貌を爲す」名帖である。ちなみに翁方綱五九歳にかかる響搨本があつて、東京国立博物館に蔵されている。これは初願園(不詳)所蔵の宋拓本を借り、問題とすべき一〇〇字だけを選び出して搨摹し、例のごとく点画の一々の相違について、他本と比較しての精審な考証を行ない、乾隆辛亥(五六年)一七九一(一)の自跋を附している。なおこの自跋は考証にわたっているが、文集等には採録されていない。

(453) 永興 虞世南(五五八〜六三八)が永興県公に封ぜられたことから虞永興とよばれたりする。字は伯施、文懿と諡された。浙江省餘姚県の人。南朝の名家の出身で、父は荔。陳の中書侍郎であつた叔父・寄の養子に入った。性は沈着冷静、少くして学を好み、兄の世基と顧野王に学んだ。文章は徐陵

を祖述し、書は王羲之七世の孫である智永を師としてその体を會得し、名声を得た。陳の文帝に召されて建安王法曹將軍となり、煬帝に仕えて秘書郎に官した。唐の太宗には重用され、著作郎となり弘文館学士を兼ねた。死後、礼部尚書を追贈され、昭陵に陪葬された。

太宗は世南の爲人の德行・忠直・博学・文辞・書翰の「五絶」挙げ「この一有るも名臣爲るに足る。しかるに世南はこれを兼ねたり」と称揚したという。その書を唐の張懷瓘『書断』には、歐陽詢・褚遂良とともに「妙品」中に列し、「(中略)伯施の隸(楷)・行・草書は妙に入る。然れども欧(陽詢)は、虞と智は均しく力は敵すと謂う可し。(中略)虞は則ち内に剛柔を含み、欧は則ち外に筋骨を露す。君子は器を蔵すと。虞を以て優れりと爲す。云々」と品評して以来、虞世南の格調の高さは歴代にわたり重んじられた。その遺作に「汝南公主墓誌稿」(破邪論序)「積時帖」(左脚帖)「大運帖」(朝会帖)があるが、信頼できるのは「孔子廟堂碑」のみである。著に「北堂書鈔」一六〇巻がある。書論に「書旨述」「筆隨論」があるが、前者には信を措く人もいるが、後者は偽托書である。伝は「旧唐書」卷七十二、「新唐書」卷二〇二、「唐會要」卷六五、李嗣真「書後品」、宣和書譜」卷八、「書史会要」卷五、深谷周道「唐代書人伝」ほかがある。

(454) 右軍 王羲之が右軍將軍に官したことで王右軍の称がある。生卒年には諸説があつて定まらないが、近年、依拠を異にするものの、徐邦達氏が「王羲之生卒年旧説平議」(一九八三年、上海美術出版社「歴代書畫家伝記考釈」所収)、谷口鉄雄氏「王羲之の生卒年の一資料」(一九八七年、「デアアルテ」)が、大安二年(升平五年)(三〇三〜三六一)説に左祖し、ことに谷口氏が宋の陶弘景「真誥」闡幽微篇を新史料としている点で説得力がある。王羲之伝には、末に挙げる史料や論文が多いので、ここでは簡記にとどめる。字は逸少、瑯邪臨沂の人。祖父の王正は尚書郎、父の王曠は淮南太守、東晋の功臣・王導の従子である。若くして王承・王悦とともに「王氏の三少」と認められた。官は秘書郎、寧遠將軍、江州刺史等を経て、右軍將軍・会稽内史に至つたが、太原の王述との政争によつて退官した。その後は名士らと山水の間に逍遊し、道家思想による服食養生をはかった。その若年の書は格別のものではなかつたが、晩年には骨氣のそなわつた蕭散風流の書作によつて、当



時すでに高い評価を得た。したがって「換驚」ほか多くの逸話が伝えられている。七男の王猷之とともに「二王」の称があるが、羲之を古今第一とする評価は、梁代以後ほぼ定着し、さらに唐・太宗の酷愛により、唐代には一段と王法が伝播した。さらに宋・太宗勅撰の『淳化閣帖』の流布によって、後世「書聖」と仰がれ、現在なおその地位はゆるぎない。その書は、八分・隸（楷）・行・草・章草・飛白をよくしたと伝える（張懷瓘『書断』上）が、伝来の作は楷・行・草の三体である。ただし真跡はなく（喪乱帖）その他の揚摹本とか臨本、また（十七帖）ほかの刻帖で、その大方は宇野雪村編『王羲之書蹟大系』に収められている。が、中には、偽跡も混っている。伝記その他については拙稿「王羲之関係資料目録」（『王羲之書蹟大系』研究篇）に採ったが、その後なお専著や論考が数多く出ている。いま伝記の基本的なものだけを挙げれば『晋書』巻八（興膳宏訳『世界文学大系72・中国散文選』筑摩書房）、魯一同『王右軍年譜』、鈴木虎雄「王羲之生卒年代考」（『学士院紀要』二〇一一）、中田勇次郎『王羲之』（講談社）、吉川忠夫『王羲之』（清水書院）、『全晋文』巻三二—三六、王汝濤『王羲之』（一九八九年、齐鲁書社）がある。

ところで本項でいう「永興直接右軍」について、清の何紹基に反論がある。即ち「覃谿の論書に、永興を以て山陰（王羲之）の正伝を接ぐとす。此の説は非也。永興の書は敬側もて勢を取る。宋以後の楷法の失は、実に備を永興に作す。試みに智師の千文と廟堂碑とを対看するに、格局筆法、一は端嚴、一は通雋なり。消息の判るる所、明眼の人は自ら当に之を弁ずべし。云々」という（『東州草堂文鈔』跋周允臣藏閩中城武本廟堂碑拓本）。

(455) 述書賦註言 以下の「右軍正書唐世稀絶」は、『述書賦』卷上寶蒙註の原文では「王羲之字逸少、晋右軍將軍。前後多見行草書。唯正書世上稀絶」につくる。

(456) 陝西本 註(138)に少しく触れたが、立碑の年代について附言する。陝西本は碑末の長い系銜のあとに「王彦超再建、安祚刻字」とあるが、再建時の紀年はない。『金石萃編』卷四一（孔子廟堂碑）の王昶の案語には、系銜の官職を『東部事略』で比定し、立碑の年を北宋の建隆・乾徳（一九六〇—六七年）のころと推定している。翁方綱も『復初齋文集』卷二「跋廟堂碑唐

本」中の双註に、「宋史の王彦超伝を按ずるに、周の顯徳中、京兆尹・永興軍節度使と為る。周の恭帝に檢校太師を加えらる。宋初には兼ねて中書令を加えられ、復た比鳳翔を鎮す。此の碑末の系銜に拠れば、仍お『永興軍節度・檢校太師・兼中書令』と署す。而れども『鎮鳳翔・封郿國』と言わざれば、則ち是の碑の重建は建隆（九六〇—六二）の末、或いは乾徳（九六三—六七）の初めならん」といっている。

(457) 純用円彎之勢 陝西本が「円彎（まる味）」であることの欠点を指摘するのは、翁方綱の見解による。即ち註(456)の引用の跋中に、陝西本の摹勒は、虞世南の筆法の精微さを逸しているといったのち「陝刻には此れ二失有り焉。一は之を敬側に失し、一は之を彎円に失す。彎円は固より専ら右肩の転ずる処に在り。此の転処は一に彎円に趨き、其の上下之を敬側に失し易きに因りて、以て凡を致す。原本の極めて停穩正定の処に遇えば、皆に趨りて敬側に就き、以て勢を取るは又凡なり。云々」といい、続いて撇・払・捺法の欠点を挙げ、なお「昔、馮定遠（馮班）未だ唐石本を見るを得ずして陝刻を評し、曰く鈍なりと。孫月峰（孫曠）唐石本を見るを得て陝刻を評し、曰く僵なりと。今、唐石本を以て之（陝西本）を細験するに、其の大端に四有あり。一に曰く彎円、二に曰く敬側、三に曰く尖纖、四に曰く笨鈍と。此れ其の大略也」といい、一段と細かく評している。

(458) 城武本 註(138)で少しく触れた。この翻刻本は例えば王澐が「山東の城武にも亦た刻有り。刻法は微弱にして、遠く此の（陝西）本の下に出ず」というのが一般的であった。が、翁方綱は、註(457)引用文に続けて、「城武本は、元の至正の間に河を濬（さら）えて之を得とは、『虞勝伯集』に見ゆ。而れども其の何れの時何れの人の重勒なるやを聞かず。其の行次空格は皆に陝本と同じからず。惟だ相王旦を相臣王旦に作り、妄りに一臣の字を増すは、最も謬れり。而して其の間 依る所の原本は、則ち陝の抛る所已に泐する有ること多けれども、城武の抛る所は猶お未だ泐せざる者のごとし。是の抛る所の原本は、陝刻抛る所の原本の前に在り。以うに、元の時始めて出するも、之を揆るに蓋し当に亦た宋の時の摹勒なるべし。予は初め其の辺際或いは碑陰に、当に重勒の歲月有るべきかと疑う。曹南に按試し、親しく此の石を見るに及ぶも、正文の外に一字無く、且つ其の石は僅かに厚さ四寸二分なり。

此の刻は多く単弱に失するに、日久しくして磨泐し、更に枯瘦を益す。而れども其中、実に陝本の失を訂正するに足るの処有り。即ち右肩の転処の如き、亦た未だ其の神妙を尽し得ざると雖も、而も原本の大局は頗る失せずと爲す。若し眞法を以て之を論ずれば、此の刻は尚お「孔祭酒碑」の上に在らん。而れども之を知る者、甚だ少なし。坊估の拓售も亦た陝刻の流伝に及ばざる也」といい、さらに「跋廟堂碑城武本三首」において、多角的に城武本を推重している。

(459) 專取清勁而又多嫌枯窘 城武本を「清勁」と評することは、また『蘇齋唐碑選』にも「陝本は円賦、城武本は清勁」とみえる。「枯窘」は見かけない語である。おそらく生氣に乏しいことをいうこの語は、「さきの『復初齋文集』巻二二「跋廟堂碑城武本三首」の第二跋に引く、何焯の「城武本は枯梗なり」を頭においた評語であろう。ところで、翁方綱の城武本に対する見解は、この第一跋に、陝西本は円賦ではあるが、尖纖・笨鈍の欠点があるのに対して「城武本の清挺穩重は、却って陝刻を正すに足るの処有り」といい、第二跋には「廟堂碑の城武本は、今日に在りては実に唐本を放驗するの眞券と爲すに足る」といい、また第三跋では「今、唐本を以て之（城武旧拓本）に對し、乃ち悉す。陝本は太はだ意を彎円に著け、且つ尖佻に傷ない、實に城武に及ばず。（中略）若し永興の用筆の意を講求し、上晋法を追わんと欲せば、則ち陝本は此れ（城武本）に及ばざる也。云々」と称揚している。

(460) 方穩 見かけない語であるが、翁は右の第三跋でも「此の（城武）本は方穩度に合す」といっており、穩和できちんとしている状態をさすのであらう。

(461) 險峙 ここではきびしさをいう語であらうが、これまた用例を知らない。

(462) 一以貫之 『論語』里仁篇の語。ここでは、単に一貫していることをい

(463) 孟法師 〈孟法師碑〉をさす。孟法師は諱を静素という女道士で、隋の文帝、唐の太宗に尊崇され九七歳の長寿を全うした。この碑は孟法師が羽化した四年後の貞觀一六年（六四二）、弟子の陳光らが、その教化の地である長安城承天門外の興道坊にあった道觀「至德觀」に建てた頌德碑である。原碑は北宋末以後に亡佚し、原拓は臨川の李宗翰旧藏で、通伝のすえわが国の三

井氏聽冰閣に帰した唐拓本の剪装本のみである。が、この本の王世貞の跋（康熙一四年一六七五）には、帖首に八字、碑叙に一〇〇余字、年月銜名三三字を脱しているとあり、改装の間に欠失したと思われる。全文は北宋の姚鉉『唐文粹』巻六五にみえるが、この剪装本計七三三字は、一七七字が失なわれていることが知られる。著録では歐陽脩『集古錄跋尾』巻五、朱長文『墨池篇』巻一八ほかにもみえるが、原石の尺寸を記録するものがない。近年、表立雲氏らが全掲のかたちを復元している（『墨』69号）が、二五行、行ごとに四五字と試算された。文は岑文本の撰、褚遂良四七歳時の書である。

この書風については、李宗翰が「遒麗の処は虞（世南）に似、端勁の処は歐（陽詢）に似たり。而も連するに分隸の遺法を以てす。風規は六代（ここでは六朝をさす）の余を振り、高古は二王以上を追う、殆ど登善（褚遂良）早年の極めて用意の書にして、亦た平生最も得意の書なり」という（唐拓本第一跋）のが、当を得た見解であらう。この前年の作である（伊闕仏龕碑）とは大きく様変りした造型感覚と多様な筆法から推して、虞法、欧法を取り入れ、また隸書の筆法をも加味したこの不統一感は、〈雁塔聖教序〉に至る書法完成へのいわば実験的作風を示すものではなからうか。

この碑には明代すでに翻刻本があった（唐拓本王世貞跋参照）。翁方綱はこの書を唐碑の第四に据えた。ただし原石拓の存在を知っていたが過眼には及んではなく（唐拓本李宗翰第二跋参照）、虞世南に近い翻本と欧陽詢に近い翻刻を見たことをいっている（『蘇齋唐碑選』）。なお翻刻については王壯弘『増補校碑隨筆』は、「此の石の重刻は極めて夥し。数本明時の拓の似きを見る。然れども字画の間架は皆に原石と類せざること、一望にして便ち知る。上海芸苑眞賞社の珂羅版影印は、即ち此の種の重刻本なり」といっている。

(464) 虞恭公碑 〈虞恭公温公碑〉、また〈温彦博碑〉といい、貞觀一一年（六三一）、陝西省醴泉県にある昭陵陪家の一、温彦博（五七四—六三七）墓前に建てられたが、いまは「昭陵博物館」の第二室に列置されている。碑石は通高約三八〇×一一三cm。双竜の間に圭首形の額を入れ、陽文の篆書四行一六字で「唐故特進尚書右僕射虞恭公温公之碑」と題している。碑身部分が高さ二二〇cmで、碑文は三六行、滿行七七字分に画されているが、明の万曆ご

るその地の農民が、採拓等のため畑を荒されるのに困り、各行とも下方三分の二強を壊したといい、現在は七〇〇字弱しか見えない。羅振玉『昭陵碑録』は古来の諸説をまとめ、二一三五字分を釈読している。文は岑文本の撰。歐陽詢八一歳時の書である。

この書も歐陽詢の他の楷書碑と比較する優劣論は多い。例えば何紹基『東洲草堂金石文鈔』題跋「跋汪鑑齋藏虞恭公温公碑旧拓本」には「(前略)醴泉は宏整にして闊落に近く、化度は遒緊にして欲側に近く、皇甫は蕭穆にして窘迫に近し。惟だ虞恭公碑のみは和介相兼ね、形神具足し、当に現存の欧書の第一為るべし。前輩の化度を推重せるは、少見を以て珍とせる耳。通論に非る也」と評して化度寺碑の上におく。翁方綱はその『復初齋文集』巻二に二跋があるが、その「跋虞恭公碑三首」の第三に「率更の此の碑を書す、時に八十有一なり。率更の書せる諸碑に在りては最も晩歳の作為り。率更の諸碑、化度第一、九成は之に次ぎ、此の碑又之に次ぐ。蓋し筆意の至る所、矜鍊師古の迹を忘る。趙子函(『石墨鐫華』巻二)の「其の字、九成・化度に視べ中を得と為す」と謂うが若きは、蓋し字の大小を以て論じ、筆法を以ての言に非ず矣。云々」と評し、その『蘇齋唐碑選』では第七に置いている。書格について揚守敬『平碑記』巻三に「王元美(『虛舟題跋』巻六)は又「平正清穆は醴泉に勝る」と。余按するに、此れ信本最晩年の書なれば、自ら応に醴泉の上在るべし。而れども碑を以て之を証すれば、則ち殊に逮ばず。蓋し正に奇險の度の少きを以てなり。反覆推尋するも、終に此れを以て彼に易えず。乃ち一生の合作、数しばは翹ざるを知る也」というのは、当を得た見解である。

(465) 肩垂 次ぎに肩をならべるの意であろうが、用例を見かけない。

(466) 張長史郎官記 唐の張旭(郎官石記)をさす。張旭(生歿年不詳)、字は伯高、江蘇省呉郡の人。開元・天宝(七一三―五六)の間に、常熟尉から左率府長史(或は金吾長史)に至ったので、張長史とも呼ばれる。伝記としてまとまったものを見ないが、杜甫の「飲中八仙歌」に「張旭三杯、草聖の伝、帽を脱し頭を露す王公の前、毫を揮り紙に落せば雲烟の如し」と謳われ、大醉すると絶叫し走りながら草書を揮毫し、ときには頭髪に墨をつけて書く等、世に「張顛」と称せられ、その書を「狂草」と呼んだといひ、また唐の

文宗は、李白の歌詩、裴旻の劍舞、張旭の草書を「三絶」と称したといふ(『新唐書』巻二〇二李白伝)など、数々の逸話や書に関する評語がある。

韓愈の「送高閑上人序」に「(前略)往時、張旭は草書を善くし、他伎を治めず。喜怒窘窮、憂悲愉快、怨恨思慕、酣醉無聊して、不平心に動くあれば、必ず草書に於て焉之を発す。物に觀るに、山水崖谷、鳥獸虫魚、草木の花実、日月列星、風雨水火、雷霆霹靂、歌舞戰鬥、天地事物の変の喜ぶ可く愕く可くを見ては、一(すべ)て書に寓す。故に旭の書の変動は、猶お鬼神の端倪す可からざるがごとし。此れを以て其の身を終え、而も後世に名あり。云々」といふ(『昌黎先生集』巻二二)のが、時代の先後を代表する評で、その後にも貶詞をみかけない。その草書として伝えるものに「自言帖」(『杜痛帖』)「古詩四帖」また「大觀帖」に「晝復帖」(『十五日帖』)がある。なおいわゆる筆法伝授の面でも重要な人で、「懷素上人草書歌序」(懷素「自叙帖」所引)に「羲・献自り技降、虞(世南)陸(柬之)相い承け、口訣手授し、以て呉郡の張旭長史に至る。姿性顛逸、古今に超絶すと雖ども、而も楷精詳、特に真正為り。云々」といひ、顔真卿の「張長史十二意筆法記」と伝えるものがある(『書苑菁華』巻一九ほか)。伝は「新唐書」巻二〇二李白伝附、「宣和書譜」巻一八、「書史会要」巻五、深谷周道「唐代書人伝」ほかがある。

郎官石記は、一名(郎官石柱記)また(郎官庁壁記)ともいふ。文は陳九言の撰、開元二九年(七四一)張旭の書である。内容は、郎官がそれぞれ昇降の年を庁舎に壁書していたのを、新たに石に刊記して都省に建碑する次第を序したものである。蘇軾の「東坡題跋」巻四「書唐氏六家書後」に、張旭の草書は「神逸」であるが、その根柢に楷書の基礎があるから秀れていると示唆したのち「今、長安に猶お長史の真書(郎官石柱記)有り。作字は簡遠にして晋宋間の人の如し」と称揚しているから、この頃にはまだ存在したようだが、その後石柱は亡佚し、拓本も明の都穆が入手した孤本が伝わるのみである。董其昌の「戲鴻堂帖」巻七にも刻入されているが、これは陳繼儒の摹本に依ったものである。孤拓本は王世貞や宋荦その他を遍伝し、清末に端方に帰したが、彼の死後に失なわれた。現在見られるのは、羅振玉が端方に借りて撮影したものからの影印本と上海文明書局影印本の二種だけである。

この書については黃庭堅が「唐人の正書、其の右に出ずる者無し。故に草聖諸家を度越し、轍跡の尋ぬ可き無し」(孤本王鑿の跋)と極賞し、また董道『広川書跋』巻七「郎官石柱記」に「郎官記に及びては、則ち楷法を備え尽す。隱約深峻、筋脈結密、毫髮も失わず。乃ち楷法の嚴、此くの如くなるを知る云々」と稱揚し、王世貞は「九成・廟堂・化度・虞公の諸楷帖、皆に三舎を辟く」と評するなど、その後にも高く評価された。翁方綱は嘉慶一〇年・二二年(一八〇五・一七)に都合四度、孤本を借覽し、題詩二と跋文三を卷末に記しているが、その『復初齋文集』卷二三に「跋郎官石記四首」(うち一跋は孤本の跋とほぼ同じ)を戴せ、該博な論考を加えている。中で前述の黃庭堅の語は、「(前略)山谷の此の語、蓋し深く艸法の原を探れる也。故に謂えらく、人は但だ長史の艸書の神妙を見るのみにして、其の原は正書従り出ずるを知らざる耳なるを。(中略)読者は須らく山谷の此の段は是れ此くの如く其の詞を抑揚するを読み、然して後、其れ並びに長史の正書、唐の諸家の上に冠なりと謂うに非るを知るべし。特だ深く其の正書の法度を著わし人をして善く其の艸書の根柢を會せ使むる耳。云々」(第四跋)と云っているのは、妥当な見解とみるべきであろう。ちなみに王鑿が引く黃庭堅の語の出典を検索し得ないが、『山谷題跋』巻四・七に郎官石記に触れ、また巻八「跋張長史書」には「(前略)蓋し其の姿性の顛逸するが故に、之を張顛と謂う。然れども其の書は極めて端正にして、字々古法に入る。人は張顛の名を聞き、是れ何種の語なるかを知らざるが故に、猖獗の書を見る毎に、輒ち之を長史に帰す耳」といふ。傾聴すべき説であろう。

〔八〕二王楷法之聖也。聖則百世師也。今由唐溯晉言之。虞歐右軍也。

褚顔大令也。此以後千百家皆系此矣。何者終唐之世。皆學褚也。其或小

變者學顔也。虞歐則嗣響爲難也。右軍之書。願學者豈乏人。而材力限之。自大令親承付受。而已小變其格。羊薄爲晉唐脈之大關鍵。則皆大令法也。入唐惟永興上接右軍之脈。其於智永千文後。作書必斐凡之遺意。恨無由見耳。陸柬之高正臣輩。習虞而已。至歐陽率更。變爲方整。宜若專師大令。然此乃是右軍滴髓。非可以貌取者。若使右軍在唐初。親見虞歐二人必皆入室者也。惟褚公眞知右軍。而行筆止到大令。今以張長史郎官記。合褚東山帖。卽知羊薄以來。率由之路。而長史用筆之訣。口授於魯公。則顔書全自大令出。而運以忠毅正直之氣。自足千古。後人不知此義。而但學其郭郭。此則以顔柳竝稱者。壞法之所由也。惜柳書金剛經。不得傳拓本耳。

二王は楷法の聖なり。聖なれば則ち百世の師なり。今唐より晋に溯りてこれを言え、虞・歐は右軍なり。褚・顔は大令なり。この以後の千百家は、皆にこれに系れり。何者か唐の世を終るまで、みな褚を学ぶや。そのあるいは小しく変れる者は顔を学ぶなり。虞・歐は則ち嗣響するも難しとなすなり。右軍の書、学ばんことを願う者、豈に人に乏しからんや。しかれども材力これに限らるれば、太令より親しく付受を承け、しかしてすでに小しくその格を変る。羊・薄は晋・唐の脈の大關鍵なるも、則ちみな大令の法なり。唐に入りては惟だ永興のみ上右軍の脈を継ぎ、その智永(千文)の後において、書を作すや必ず斐凡の遺意なるも、恨むらくは由りて見るなきのみ。陸柬之・高正臣が輩は、虞を習えるのみ。歐陽率更に至り、変りて方整となる。宜なるかな、専ら大令を師とするが若きは。然れどもこれ乃ち是れ右軍の滴髓にして、貌を

もって取るべきものにあらず。若し右軍をして唐初に在りて、親しく虞・欧を見しむれば、二人 必ず皆に室に入る者ならん。惟だ褚公は真に右軍を知るも、行筆は止だ大令に到るのみ。今 張長史の〈郎官記〉をもつて、褚の〈東山帖〉に合せば、即ち羊・薄以来、率ねこれに由りて路せるを知る。しかして長史用筆の訣は、魯公に口授せるなれば、則ち顔書は全て大令より出ず。しかれども運らずに忠毅正直の氣をもつてし、自ら千古に足るなり。後人はこの義を知らずして、但だその郭を学ぶのみ。これ則ち顔・柳をもつて並称する者は、法を壊すの由るところなり。柳の書せる〈金剛經〉、伝拓本を得ざるを惜しむのみ。

(467) 二王 ここでは王羲之と王献之をさす。語の初出は『南史』卷三二張融伝。

(468) 右軍 (454)前出。右軍將軍の略で、王羲之をさす。

(469) 大令 註(404)前出

(470) 顔 上文の褚(遂良)・顔のそれと同じく唐の顔真卿(七〇九—八五年)をさす。字は清臣、諡は文忠。山東省臨沂の人。平原太守となつたので顔平原、魯郡公に封ぜられたので顔魯公ともよばれる。開元二年(七三四)の進士。醴泉尉より官をすすめ、殿中侍史に遷つたおり、硬骨の言動が宰相の楊国忠に憎まれ、平原太守に転出させられた。天宝一四載(七五五)安禄山の乱に、河北において義兵を率いて抵抗し、唐中興の機縁を果した。その後、肅宗に憲部尚書に拜せられたのはじめ、代宗のとき戸部侍郎、尚書右丞を歴任し、魯郡公に封ぜられたが、その時々々の権力者と合わず、しばしば左遷された。建中三年(七八二)李希烈(七二二—七八二)の乱には、盧杞に忌まれて、説諭の使に遣られ、李希烈に幽閉されること三年後、唐に節を立てて屈しないため、河南省蔡州の竜興寺で縊殺された。

顔真卿の家系には、五代の祖顔之推『顔氏家訓』、曾祖勤礼の兄である顔

師古『漢書註』、伯父顔元孫『干祿字書』をはじめ学者が多いが、また顔勤礼、祖父の昭甫、兄の允南など能書をも生んでいる。真卿は幼少のころ父惟貞を亡し、母の殷氏に教育されたが、歴代通婚したこの殷氏も殷仲容などの能書を生んでおり、また顔昭甫に嫁した段仲容の姉が、顔惟貞に筆法を授けたというから、真卿は顔・殷両家の能書の血を享けた。顔真卿の数多くの書作は、変転の目まぐるしい官界生活の間にもなされたが、その剛直の境涯と寛裕なる心栄えから「顔法」とよばれる独自の楷書を形成した。適度な筆力と重厚な粘着性の強い書風であるが、そこには北朝末期の大字書法に根ざした様式がうかがえる。楷書には〈多宝塔碑〉〈東方朔画贊〉〈郭氏家廟碑〉〈麻姑仙壇記〉〈宋璟碑〉〈顔勤礼碑〉〈建中告身帖〉〈顔氏家廟碑〉ほかがある。またその行草書は、王羲之の書法に根ざしながらも、氣宇の博大さと雄強な筆力で一幟を樹て、「三稿」とよばれる〈祭姪文稿〉〈祭伯父文稿〉〈争座位文稿〉が著名で、就中〈祭姪文稿〉は唯一の真蹟として貴重である。さらに雑体書の〈送裴將軍詩〉も顔真卿の書と伝承される。楷書・行草書とも、ことに蘇軾・黄庭堅の称揚によって、宋以来の書の歴史に多大の影響を与えた。その専帖には、何紹基の『忠義堂帖』二卷、張穆の『忠義堂帖』一卷、光照の『忠義堂顔帖』四卷がある。

伝は『旧唐書』卷二二八、『新唐書』卷一五三、『宣和書譜』卷三、留元剛『顔魯公年譜』、外山軍治『顔真卿』、深谷周道『顔真卿』、杉村邦彦「顔真卿論」(『中国中世史研究』)その他がある。

(471) 嗣響 前業を継承する意。『宋書』謝靈運伝に「絶唱高蹤、久無嗣響」とある。

(472) 羊 劉宋の羊欣(三七〇—四四二)をさす。字は敬元、山東省泰山南城の人。一時、桓玄に起用されたが間もなく病と称して辞任し、閑居一〇年に及んだ。義熙(四〇五—一八)の末、武帝は劉藩の司馬に擢んじ、文帝のとき新安太守に転じた。ついで義興太守に転ぜられたが、病を理由に致仕した。

書は父の縁で王献之について学び、その楷・行・草書の秘奥を極め、「亦た猶お顔回と夫子と步驟の近きに有るがごとし」と評され、「王(献之)を買いて羊(欣)を得るも、望む所を失なわず」とまで同時に重んじられた(『書

断』卷中)。その著『古來能書人名』は、秦—東晋の書人六九人の伝記とその得意な書体を挙げて批評を加えたもので、個人を対象とした書論ではもっとも古く、また評価の基準となる評語を示唆した面においても、書論史上重要である。ただその書としては『淳化閣帖』卷三に『三月六日帖』をみるのみである。伝は『宋書』卷六二、『南史』卷三六、『宣和書譜』卷一六、谷口鐵雄『羊欣の伝記とその書論』、『東洋美術論考』その他がある。

(473) 薄 劉宋の薄紹之(生歿不詳)をさす。字は敬叔、江蘇省丹揚の人。官は給事中に至った。書は王献之を学び、楷・行・草を能くして、時に羊・薄と目された。行・草書は羊欣を越えるが、楷書は筆力の点で羊欣に劣ると評せられる(『書断』卷中)、『述書賦』卷上にも「纖円克成るも、骨力猶お稚」とあるように、上品ではあるが骨力が不足だったらしい。書は『淳化閣帖』卷四に『廻換帖』を見るのみである。伝は『宣和書譜』卷一六、『書史会要』卷四など。

(474) 閔振 振は板の錯写で、ここでは結節点のポイントほどの意である。

(475) 智永千文 隋の積・智永(千字文)をいう。智永(生歿年不詳。梁・陳・隋三代にわたる)姓は王、名は法極。浙江省紹興の人。王羲之七世の孫であるが、兄の孝賓(法名は惠欣)とも出家し、呉興の永欣寺に住した。書は王法を学び伝え、ことに楷・草書を善くした。当時に書名が高かったことで「鉄門限」、精進ぶりを示唆する「退筆塚」の逸話は著名であるが、永欣寺の閣上に三〇年間こもって『真草千字文』八百本を臨書し、浙東の諸寺に各一本を施入したことは、ことに有名である。その書を『書断』卷中に「微や有道(張芝)の風を尚び、半ば右軍(王羲之)の肉を得。諸体を兼ね能くし、草に於て最も優る。気調は欧・虞に下るも、精熟は羊(欣)・薄(紹之)に過ぐ。云々」と評している。『餘清齋帖』には『帰田賦』を、『大観帖』に『代申帖』を智永の書として刻入するが、両帖とも疑問がある。なお述作には、『題右軍業毅論後』(『法書要録』卷二)がある。伝は『宣和書譜』卷一七、小川環樹『智永』(『書道芸術』卷二)その他がある。

〈千字文〉は、『天地玄黄』より「焉哉乎也」までの一〇〇〇字を、一字も重複しないで四字句、計二五〇句の隔句韻で古詩形にまとめ、自然現象から人倫にわたる万般の事柄を内容とする。唐の李綽『尚書故実』によれば、

梁の武帝が諸王の書の手本用に、殷鉄石に命じて、王羲之の書から重複しない一〇〇〇字を擲擧させたが、文章としての体裁をなしていなかったため、改めて周興之(四七〇?—五二一年)に命じて韻文にまとめさせた。周は一夜で完成して進上したが、髪は真白になっていた、とある。唐の武平一『徐氏法書記』にも、話の骨子としては右と同様のことをいっているから、梁代に集王書千字文があったことになるが、唐代すでに伝本について語るものはない。ただ王羲之の『臨鍾繇千字文』というのが伝わっている。これは「二儀日月」にはじまる現存九七四字で重複の字はなく、四字で一句を成しているが、ほとんど文意が通じない。宣和内府の印記からみて『宣和書譜』卷一五(行書)の目に挙げられている真蹟本ではあるが、徐邦達氏によれば、北宋初期の偽作だろうという(『古書画偽託考弁』文字部上巻)。まして『淳化閣帖』卷一刻入の漢の章帝(千字文)などは信すべくもない。ただ梁武帝が千字文を作り沈衆が注解したという説(『南史』卷五七沈約伝)、あるいは梁の蕭子範が作り蔡遠が註した千字文のあることをいう(『南史』齊高帝諸子上伝)ことからみて、集王書によらない(千字文)もあつたらしい。が、いずれも伝わらない。現存の千字本で最も古いのが智永の書と伝えられるものであるが、のちに述べるこの真蹟(小川本)、刻本(関中本)とも首に「真草千字文。勅員外散騎侍郎・周興嗣次韻」とあるところから、さきの李綽・武平一の記録を信とすれば、智永は集王書千字文に原拠したことになる。が、その事実を語る史料はない。なおまたこの真蹟・刻本とも智永の署款はないので、確証はないわけだが、唐の何延之『蘭亭記』にいう「永欣寺閣上に於いて臨し得たる真草千字文」の語および関中本の北宋・大観三年(一一〇九)薛嗣昌の刻跋が智永とすること、さらにこれが南朝書法の特質をそなえていることなどから、智永の作に比定されている。が、近年の紹介になる敦煌莫高窟ベリオ将来のパリ国立図書館蔵(蔣善進臨・千字文断簡)(『敦煌書法叢刊』卷一八(碑金)(一)所収)が、その巻末に「貞観一五年(六四一)七月、臨出此本。蔣善進記」とあることで——蔣氏原拠の本が小川本・関中本とは別系ではあるものの、行内の配字は同一——、唐太宗の諱を避けていない真蹟小川本は、唐代以前の作とみるに足る証左となっている。なお同文を楷書と草書で交互に並記する書式が、この(千字本)から始まったか否かについて

ては検討の余地をのこしている。ちなみに、千字本に先だつ識字のテキスト「急就章」に、スライン発見の楼蘭文書中、四世紀中葉ころとみらるる「急就章」断簡があつて、一章ずつではあるが楷書と草書を並記する書式をとつてゐる。先行例として注目されよう。

識字用テキストの千字文は、唐代以後歴代にわたつて能書家による作がのこされている。唐代だけでも歐陽詢（楷書）、褚遂良（楷書）、趙模（行書）、孫過庭（草書）、懷素（草書二種）、張旭（草書断簡）、高閑（草書断簡）がある。ただし、以上いずれも真蹟とするには疑問がある。偽托書が多いことは「千字文」が識字用のみならず、範書としての一面を担つていたことを物語る。範書としての諸本については、須羽源一「歴代の千字文考察」〔『書苑』三一―一〕、丁福保『四部総録芸術編』巻下が詳しい。ここでは「真草千字文」として最も著名な二本のみを簡記する。

「真蹟本」は、巻末の内藤湖南がその長跋中で『東大寺献物帳』「書法廿卷」中の「真草千字文」に該当すると指摘したことがほぼ通説となつた一本である。麻紙に空野を引き、標題二行、本文二〇〇行。もとの卷子装を五一頁の冊子本に改装している。首の二頁分に傷みが多く、中間の「家給千兵」の草書部分を欠失している。内藤湖南が王羲之書の唐摹本であるかのごとく、この見解は否定されるが、唐諱の「淵、世、民」を欠闕しないほか、真蹟であることも確かだ。書法にも唐代以前の様式を散見するなど、智永八百本中の一がわが国に舶載されたと考えられる。正倉院にあった原巻は、いつの頃か民間に流出した。幕末には江馬天江が偶然入手し、谷鉄臣に渡り（『谷氏本』ともいう）、のち小川簡齋氏に帰し（『小川本』ともいう）、戦後国宝に指定された。

「関中本」は、別に「西安本」とも呼ばれる刻石本で、原石はつとに亡佚したが、重刻本が西安碑林の第三室にある。原刻宋拓本の後の薛嗣昌の刻跋によれば、長安の崔氏所蔵の真蹟本を、大観三年（一一〇九）に模刻し、漕司南序に置いたとある。跋の末に小字二行で「方綱摹、李寿永・寿明刊」と入れているものが原石拓で、模刻本にはこれがないといひ、また明末に松江学舎にも翻刻本のあることをいう（欧陽輔『集古求真』卷三）。なおこの原石拓に高島槐安居旧蔵本、三井文庫本、それに北京・故宫博物院蔵本がある。

この書は、真蹟本が「智永は王書の半ば肉を得た」というのを髣髴させる豊麗な書風に対し、点画は総じて細味で清爽である。また「天地玄黄」の玄と「桓公匡合」の匡の末画を欠く。これは宋・太祖の小名と諱を避たものである。翁方綱はこの二字と「敬」字の末画が長すぎる（欠闕部分を後添した）ことを理由に、薛氏原石本は宋初の人が書いたものに拠るといふ説を出している（『復初齋文集』卷二五「真草千字文跋」）。が、欧陽輔はこれを駁している（前掲書）。なおまた真蹟本と関中本相互には、偏旁その他の部分に異なる字がある。『宣和書譜』卷一七智永の目に「真草千字文」の「真草小字千字文」が挙げられているところからみて、宋代にはなお八〇〇本中の何本かがあつたわけで、それらが字粒も用字も同一であつたとは思われなため、文字の異同のみでは真偽の決め手にはなりえない。

(476) 柴几之遺意 柴几はカヤの木の机。虞蘇『論書表』に「(王羲之)嘗て一門生の家に詣る。佳饌を設け、供億甚だ盛なり。之に感じ、書を以て相い報いんと欲す。一新柴の牀几の至つて滑浄なるもの有るを見て、乃ち之に書す。草・正相い半ばす。門生、王郡に帰るを送り、家に還る。其の父已に刮り尽す。生、書を失ひ、驚懷、日を累ぬ」を頭におき、ここは虞世南が智永の書法を介し、王羲之の書法を伝承していることをいう。

(477) 陸柬之 陸柬之（生歿年不詳）は、虞世南の甥で江蘇省呉県の人。官は朝散大夫、崇文侍書学士より太子司儀郎に至つたので、陸司儀とも呼ばれる。書人としての伝は『書断』巻中がもっとも詳しく「少くして舅氏（虞世南）を学び、臨写の合なる所は、亦た猶お張翼、羲之の表章を換え、蔡邕を平子（張衡）の後身と為すがごとし。而して晩には二王を習い、尤も其の古を尚ぶ。中年の迹は、猶お怯懦有り」と雖ども、総章（六六八―七〇年）已後は、乃ち筋骨を備え、殊に質朴を矜り、夫の綺靡を恥す。（中略）然れども效倣に工みにして、独断に劣る」とし、その楷行を《妙品》、草書を《能品》に据えている。また宋の朱長文『後書断』では、書の専家で欧陽詢・虞世南と齊名を得たという。ただし『述書賦』の竇蒙の註には「柬之、虞を效うも、疏薄にして逮はず」ともいう。その真蹟《文賦》が伝わっている（台北・故宫博物院蔵）。清の孫承沢の跋に「全て禊帖を摹し、而して其の舅氏虞永興の円勁を帯び、遂に韻法双つながら絶（すぐ）れたるを覚ゆ。唐初の諸公は晋に仿

うも、率ね板直に渉る。此の如きの妙腕、未だ其の匹を見ず」と称揚する。ただし陸柬之の書は、専家の習気があつて晋人の風韻に乏しいから、この評は過褒のきらいがある。伝は『新唐書』卷二六、『宣和書譜』卷八、『書史会要』ほかにもみえる。

(478) 高正臣 高正臣(生歿年不詳)は、河北省広平の人。官は衛尉卿に至つたという。がむしろ、書の専家である。その楷書作がいま昭陵博物館第二室に(杜君綽碑)(六六三年)、第五室に(趙国太妃燕氏碑)(六七一年)が列置されているが、前者の系銜に「殷王府□□□□□□弘文館・高正臣書」とあり、後者には「奉議郎・守冀王府属・直古春坊・侍皇太子書」とある。またその行書碑(撰山栖霞寺明徵君碑)(六七六年)の系銜は「朝議郎・左金吾衛長史・侍相王書、臣高正臣奉勅書」とある。これを要するに高正臣は弘文館において欧・虞に楷法を習得し、その技倆によって皇太子(李治)直属のいわば祐筆だったことが知られる。書人としての伝は張懷瓘『書断』が最も詳しい。そこには、張懷瓘の父と高正臣とは旧知の仲であったというから、その逸話も信用できよう。その書を「脂肉、頗や多く、骨氣、微少なり。容を修め服を整え、尚お風流有り。『堂々たる乎、張也』と謂う可し。玄宗、甚だ其の書を受す。(中略)潤州・湖州に任じて自り、筋骨漸く備わる。比る蓄え見る者、多くは謂いて褚と為す。後、申・邵等の州に任ぜらるるや、体法又に変じ、幾んど古に合す矣。云々」といい、『能品』に据えている。伝は他に『新唐書』卷七一・宰相世系表。

(479) 滴髓 用例として『佩文韻府』引「鄭惟京賦」の「流膏曲澗、滴髓奇峰」を見かけるのみである。

(480) 褚東山帖 褚遂良(東山帖)をいう。この帖について翁方綱は、後述の卷一五(一四項)に『汝帖』にあつて(郎官石記)と頗る近い」といつているが、容庚編『叢帖目』所載の『汝帖』の目にも見ない。なお王澐『虛舟題跋』卷七に(東山二帖)を挙げては、具体的な内容は知り得ない。

(481) 魯公 顔真卿を指す。註(470)前出。なお前句の「長史用筆之訣」は、『張長史十二意筆法記』をさす。

(482) 郭郭 城外の大きい廓をいう語であるが、ここでは形を大まかにとらえるだけで、顔書の内容を把握できていないことにいう。

(483) 柳 顔真卿に対し柳公権をいう。註(348)前出。

(484) 壞法之所由 顔・柳二人が魏晉の楷法を壞したという認識は、米芾を初めとする。即ちその『海岳名言』に「顔魯公の行字(行書)は教う可きも、真(楷書)は便ち俗品に入る」といい、さらに柳公権に対しては註(348)に引用したように、「醜怪惡札の書と為す。柳自りして始めて俗書有り」と貶している。ただし蘇軾が「柳少師の書は、本、顔より出ず。而して能く自ら新意を出す。一字百金は虚語に非る也」という(『東坡題跋』卷四『書唐氏六家書後』)などの褒詞も多い。

(485) 金剛經 柳公権の(金剛般若波羅密多經)をさす。翁方綱が下文に「伝拓本を得ず」という金剛經は、たぶん董道『広川書跋』卷八「金剛經」に「此の經は本と西明寺に書し、後にも亦た屢しば改む矣。石は幸に存し、兵火に墜ちず。柳玘謂う、備(つづ)さに鍾・王・虞・褚・陸の骨有りと。今、其の書を考うるに、誠に謂えらく、絶芸尤も貴ぶ可き也」とあるのを指すと思う。がなお、趙明誠『金石録』卷一〇には会昌四年(八四四)の柳書(金剛經)を載せているが、明代以降これら金剛經を記録するものがない。ちなみに柳公権の最も若書きに当る長慶三年(八二四、四七歳)(金剛經)の唐拓孤本が、一九〇八年にかの敦煌「藏經洞」でペリオが発見してフランスに齎し、パリ図書館に現蔵されている。つとに羅振玉『墨林星鳳』に載録したほか、各種の影印本がある。四六四行、毎行一字、一字の欠損もない。

〔九〕必知唐楷所從出。而後可學唐楷。馬伏波云。(486) 良工不示人以璞。此一語凡詩文書法皆當之。知。率更之化度銘。(487) 何嘗有一筆學右軍哉。醴泉銘固云蘭亭後勁。然而已微露分隸之蹤矣。(488) 至褚公伊闕三龕記。(489) 則純乎分隸矣。顔魯公卻無一筆露大令之蹤。然而後世學者。不知大令法。未可學顔也。

必ず唐楷の従りて出ずるところを知り、しかして後唐楷を学ぶべ



し。馬伏波云う、「良工は人に示すに璞をもってせず」と。この一語は凡そ詩文書法皆にこれに当る。知る、率更の《化度銘》何ぞかつて一筆として右軍に学ぶものあらんや。《醴泉銘》は固より蘭亭の後勁と云う。然而どもすでに微かに分隸の蹤を露わす。褚公の《伊闕三龕記》に至りては、則ち純乎として分隸たり。顔魯公は却って一筆として大令の蹤を露わすものなし。然りしこうして後世の学ぶ者は、大令の法を知らずして、未だ顔を学ぶべからざるなり。

(486) 馬伏波云良工不示人以璞 伏波は伏波將軍の略。後漢の馬援(前一四一四九年)をさす。「良工云々」は、りっぱな職人は、必ず完成した姿を示すことの譬で、「後漢書」卷五四馬援伝にみえる語。

(487) 化度寺 化度寺碑をさす。註(491)前出。

(488) 醴泉銘 九成宮醴泉銘をさす。註(492)前出。

(489) 蘭亭 王羲之の行書作《蘭亭序》をさす。蘭亭序(蘇軾が家諱の序を避けて叙字と記して以後蘭亭叙と襲用する)は、王羲之が永和九年(三五)三月三日、会稽山陰(浙江省紹興県)の蘭亭に、謝安ら四一人の名士を招いて祓禊の礼を行なったのち、流觴曲水の雅宴を催して詩酒に興じた。このとき成った詩集の序文を王羲之が揮毫した。その草稿二八行、全文三三四字。これが現行蘭亭序の原蹟であると伝えられている。内容と状態からみて《蘭亭詩集序稿》とでもいふべきところ、唐以前は蘭亭集序また臨河序(『世説新語』企羨篇および註)といい、唐以後に蘭亭序(叙)あるいは禊帖などともいう。この原蹟の伝来については、唐の劉餗『隋唐嘉話』、何延之『蘭亭記』ほかで小説風に仕立てられ、唐太宗の『賺蘭亭』の逸話が殊に有名であるが、太宗の王書崇尚により、崩御に臨みその昭陵に随葬せしめたと伝える。したがって現存の蘭亭序は搨摹本と翻刻ばかりである。太宗は原蹟入手後、貞觀年間(六二七〜四九)に、搨書人の趙模・韓道政・馮承素・諸葛貞にそれぞれ搨摹させたものと、歐陽詢、褚遂良らに臨摹させたと伝えるものがあつ

た。石刻本は歐陽詢の臨摹がもっとも優れていたものでこれを底本にしたとされ、《定武本蘭亭序》の原石がこれであるという。ただし、宋以後も臨摹や模勒がくり返されているため、それがどこまで原蹟の面目を留めているかは衆訟あつて今なお定説がない。なお郭沫若は、現存蘭亭の文章そのものが偽作とみる清の李文田の説を襲ぎ、さらに踏みこんで隋の智永の作だと断案した(『文物』'67-6)。ただしこの説は否定の傾向にある。こうした原蹟そのものの真偽問題をはじめ、各種伝本の評価に対してもさまざまな論議があつて、現在も多くの問題をのこしている。

唐代以降に取り沙汰された問題点については、古くは『書苑』二一四に、資料とその考察の大概が提示されているが、その後も多くの論考がある。それらの論文は拙稿「王羲之関係文献目録」(『王羲之書蹟大系』研究篇)中に掲げた。就中、近年のものでは、啓功「蘭亭帖考」(『啓功叢考』所収)、福本雅一「蘭亭考」(『瘦墨集』所収)は、立論の基盤を異にするものの、それぞれ出色の論考である。

搨摹・刻本の種類は、南宋すでに「蘭亭八百本」の称があるように、現在なお夥しく、これら影印本は約二百点にもおよぶ。影印本の細目については坂田玄翔「影印本蘭亭序」(『未央』2所収)が詳しい。

現行本中では、《蘭亭八柱第一本》(別名《張金界奴本》)という。北京故宮博物院蔵、《蘭亭八柱第三本》(別名《神龍半印本》《馮承素本》)とも。北京故宮博物院蔵)の搨摹本ならびに刻帖、それに《定武蘭亭序》(五字未損「吳炳本」、五字已損「独孤長老本」ともに東京国立博物館蔵)の刻帖が最も著名である。なお諸本の考訂については、翁方綱「蘇米齋蘭亭考」八卷(『芸術叢編』《法帖考》所収は標点本)は、該博精審の研究である。また『復初齋文集』卷二七には「跋齊原曹侍郎所収趙子固落水蘭亭卷」以下、計九跋がある。

(490) 分隸 註(177)前出。

(491) 伊闕三龕記 通称は《伊闕三龕記》、単に《三龕記》ともいう。註(318)前出。

〔一〇〕宋人惟不知顔法所自來。故愈學顔而愈無骨。其所以不知顔法者、摠坐不知晉法也。品蘇書者。必知羊薄以上之脈。而後得蘇書之髓。山谷書能得褚公意。亦是如此。米則竟以右軍自居。竟以二王而上自居。米之爲右軍也。仲氏之初見聖人時也。所以必不得已。於宋人求晉法。而得吳傅朋矣。

宋人は惟れ顔法の自りて来るところを知らず。故に愈いよ顔を学びて愈いよ骨なし。その顔法を知らざる所以のものは、総て晋法を知らざるに坐るなり。蘇の書を品する者は、必ず羊・薄以上の脈を知り、しかして後に蘇書の髓を得ん。山谷の書は、能く褚公の意を得るも、亦た是れかくのごとし。米は則ち竟に右軍をもって自居し、竟に二王よりして上をもって自居す。米の右軍を爲むや、仲氏の初めて聖人に見ゆる時のごときなり。所以に必ず己むを得ずして、宋人において晋法を求むに、而ち吳傅朋を得ん。

(492) 蘇 蘇軾をさす。蘇軾(一〇三六—一一〇二)、字は子瞻、号は東坡居士ほか。諡は文忠。四川省眉山の人。嘉祐二年の進士。英宗朝(一〇六三—六六年)に直史館となったが、神宗朝における新法党と旧法党の政争に旧法党を支持したため、党争に敗れて地方官に転出し、元豊二年(一〇七九)には筆禍に遇い、下獄後また湖南省に流謫された。哲宗が即位(一一〇八五年)し、旧法党が復権して中央に復帰し、翰林学士兼侍読学士に拜された。が、旧法党内の政争で、一時また中央を去り、元祐七年(一一〇九二)再び中央にもどり礼部尚書兼端殿・翰林侍読学士に拜せられた。しかし紹聖元年(一一〇九四)以後、またもや党籍に坐し、広東省から海南島へ流謫された。のち徽宗即位(一一一〇〇)の大赦をうけ、帰京の途次、江蘇省内で客死した。蘇軾

は新興士大夫中の俊英として、官途にも矚望されたが不遇であった。しかし天分、学殖ともに一世に秀せ、ことに詩は宋代第一とされ、文もまた唐宋八大家の一人として韓愈につぐ文豪である。その名作「赤壁賦」によって、後代、壬戌の年には「寿蘇会」が催されるほど、その文名を慕われた。詩文集に『蘇文忠公集』がある。

その書もまた「宋四大家」の一人に挙げられる。後輩の黄庭堅と同じく、唐中期の革新派の人々、ことに顔真卿の書を評価したが、「新意を出す」ことを重んじ、独自の格調高い書風を拓いた。代表作に「黄州寒食詩卷」、李白仙詩卷、洞庭春色・中山松醪二賦、宸奎閣碑があり、「肉豊骨勁、態濃意淡」をその特質とする。書論面でも『東坡題跋』六卷に独自の見解を示している。專帖に明刻の『晚香堂蘇帖』三五卷、清刻の『景蘇園帖』六卷その他がある。伝記は数多いが、『宋史』卷三三八、「宋人軼事彙編」卷一二、小川環樹『蘇軾』、『中国詩人選集』二、王保珍「増補蘇東坡年譜會証」(『国立台湾大学文史叢刊』)、中田勇次郎「蘇東坡の書と書論」(『中国書論集』)、合山究「蘇軾の文人活動とその要因」(『九州中国学会報』一四)、「特集・蘇東坡とその周辺」(『書論』五)その他がある。

(493) 羊薄 羊欣と薄紹之をいう。註(472)・(473)前出。

(494) 米 米芾をさす。註(71)前出。

(495) 自居 自らその位置に安住すること。例えば『晋書』王詳伝「師の道を以て自居す」。

(496) 仲氏之初見聖人時 直接に典拠するものはない。仲氏は仲由字は子路をさし、聖人は孔子をさす。この句は『史記』卷六七仲尼弟子列伝の「子路の性鄙にして勇力を好み、志伉直たり。雄鶏を冠し、豕豚を佩し、孔子を陵暴せんとす」をふまえる。俠客風の子路が孔子をとっちめようとして肩いからせて面会したが、結局は孔子に心服して入門した、そのように、王羲之の書に対処する米芾も、まさに入門時の子路のようだというのが、翁方綱の見解である。

(497) 吳傅朋 傅朋は吳説(生歿年不詳)の字。号は練塘、紫溪。浙江省錢塘の人。王安石の義弟である。南宋の紹興一四年(一一四四)尚書郎となり、のち江西上饒の太守となった。もっぱら書人として有名で、楷・行・草・章

草・榜書のほか篆・隸に至るまで能くしたという。小楷は魏晉に則り宋代第一の名があるが、《独孤僧本蘭亭跋》に、また行書は《二事帖》、草書は《申福帖》その他により、当時にあっては一職を樹てている。ただし楷・行・草書では守旧派とみるべきであろう。呉説の本領はその遊糸書で、在世當時すでに高宗『翰墨志』に「紹興以来、雜書・遊糸書は、惟だ錢塘の呉説のみ」といわれ、また樓鑰『攻媿集』には「呉傅朋の遊糸書、前に古人無し」と称えている。いまその《蘇軾三詩卷》（京都・藤井有鄰館蔵）は、遊糸書唯一の真蹟である。伝は『宝晋齋法書贊』卷二三、『皇宋書録』卷下、『書史会要』卷六、『宋史翼』卷二八、『宋人軼事彙編』卷一六、中田勇次郎「呉説の遊糸書」（『中国書論集』）、福本雅一「遊糸と連綿」（『頽筆集』）がある。

〔一一〕嘗聞。宋之黃長睿書得晉法。而未之見也。就所及見者。宋之呉傅朋元之趙子昂。是皆得晉法歟。或亦尙未敢質言也。元人皆趙法耳。明之宋仲溫孫雪居。皆能知古意者也。未知得晉法否。若明末妻子柔我國朝初年施愚山。亦能追晉法者。所見二家手蹟。尙未多耳。

かつて聞く、宋の黄長睿の書は晋法を得と。しかれども未だこれを見ざるなり。就ち見るに及ぶところのもの、宋の呉傅朋 元の趙子昂も、是れみな晋法を得たるか。あるいは亦た尙お未だ敢ては言を質せざるなり。元人はみな趙の法なるのみ。明の宋仲温・孫雪居は、みな能く古意を知る者なり。未だ晋法を得しや否やを知らず。明末の妻子柔 我が国朝初年の施愚山の若きも、亦た能く晋法を追う者なるも、見るところの二家の手蹟は、尙お未だ多からざるのみ。

(498) 黄長睿 長睿は黄伯思（一〇七九—一一一八）の字。別の字は霄賓。雲

林子と号した。福建省邵武の人。元符三年（一一〇〇）の進士で、官は秘書郎に至った。博学で尤も文字学に精通し、金文の字体を研究して『古器説』（佚書）を著した。また『淳化閣帖』を実証的に考証した『法帖刊誤』があり、死後に子の黄訪によって、碑帖や法書名画の題跋類ともに『東觀餘論』二卷にまとめられた。書は各体を能くし、鍾繇・王羲之を学んで魏晉の風氣をそなえたというが、伝承作品を見ない。伝は『宋史』四四三、『皇宋書録』卷中、『書史会要』卷六、『四庫全書総目提要』卷一七その他がある。

(499) 趙子昂 子昂は趙孟頫（一二五四—一三二二）の字。号は松雪道人ほか。浙江省呉興の人。宋・太祖の四男である秦王・徳芳の末裔で、南宋末に真州司戸参軍に官したが、二六歳の時宋は滅び、ついで元朝に仕えたため、その節操のなさを非難する人は多い。元・世祖の至元二十四年（一二八七）、兵部郎中を授けられて以後、成宗・武宗・仁宗・英宗の五代に信任され、延祐三年（一三一六）には翰林学士承旨にまで至った。死後、江浙行省平章事を贈られ、魏国公に封ぜられ、文敏と諡された。趙呉興、趙承旨、魏国公、趙文敏の呼称がある。

詩文書画また古器物の鑑定においても一代に傑出した。『松雪齋集』一〇卷はその詩文集。絵画は山水・竹石・人馬・花鳥を善くし、画壇へも強い影響力をもち、元末四大家に数えられる王蒙のほか、多くの文人画家を庇護した。その《鵲華秋色図卷》（台北・故宮博物院蔵）は最も有名である。

書は篆・隸・楷・行・草・章草等、各体を善くしたが、ことに楷・行・草書は、二王を典範として学び、上品で婉麗な書風を築いた。天分の秀れたことにもよるが、臨書に励み、智永《千字文》を学ぶこと二〇年間に百をも数えたとい（四四歳の自題）、《蘭亭序》を臨すること数百本という（《蘭亭序十三跋》）。いずれの作も、一日に一万字を学習したという練磨の所産に成る精熟な書風である。明の董其昌、清の包世臣らには厳しく批判をうけているが、元・明・清初の書壇に多大の影響を与えた。真蹟には撰書の《玄妙觀重修三門記》、行書の《赤壁一賦帖》、草書の《唐人臨瞻近・漢時帖補書》、章草の《急就章》が著名であるが、尺牘類も数多く遺されている。なお專帖には『松雪齋法書』六卷、『松雲齋法書墨刻』六卷、『橘隱園趙帖』四卷がある。また『印史』二卷があったが亡佚した。伝記は数多いが、『元史』卷一七一、

『松雪齋文集』卷末「行状」、『圭齋文集』卷九「神道碑」、『宋人軼事彙編』卷一九、『書史会要』卷七、『図絵宝鑑』巻五が基本書で、また洗玉清『元趙松雲之書画』（『巖南學報』二二一二）、蔣天格『弁趙孟堅与趙孟頫之間的關係』（『文物』一九六二一二）、福本雅一『元朝書人伝』（『書論』四）その他がある。

(500) 宋仲温 仲温は宋克（一三二二—一八七）の字。号は南宮生、江蘇省長洲の人。体軀堂々の任侠肌で、文武両道を修めた。元末の動乱期には中原に奔走したが、志を遂げ得ず、江浙の間に遊歴したり、帰郷してのち社交に耽つたりして家産を傾けた。洪武（一三六八—一九八）の初め鳳翔府同知となつたが間もなく辞任した。晩年は交遊を節し、法書古器物を座右に楽しみ、魏晉の書を臨摹した。『明史』文苑伝には「門を杜して染翰し、日に十紙を費し、遂に善書を以て天下に名あり」と称揚されている。

小楷はことに鍾繇風で名が高く、伝存作に「李白行路難」と刻石の「七姫権厝誌」などがある。また章草にすぐれ「急就草卷」がある。明初に「三宋二沈」（宋克・宋広・宋璣・沈度・沈璟）の称があるが、沈度とともに「とも聞えが高い。また細竹画を能くしたという。伝は『明史』巻二八五、高啓「南宮生伝」（『鳧藻集』巻四）、『明詩綜』巻一〇、『明画録』巻七、『無声詩史』巻一、福本雅一「明朝書人伝」（『書論』二二）その他がある。

(501) 孫雪居 雪居は孫克弘（一五三三—一六一一）の号。字は允執、江蘇省松江の人。父承恩の蔭を以て官は応天府治中を授かり、漢陽知府に至つた。致仕後は東閣草堂に居り、専ら書画に耽つた。画は沈周・陸治を師とし、山水・花鳥・蘭竹・人物・仙釈にわたつて精妙で、その絵を求めめる人が引きもきらず、名は一時に重んじられた。が晩年は墨梅のみしか画かなかつたという。楷書は宋克を学び、八分は漢隸を宗としたが、伝存作は少なく、隸書の〈庭園記軸〉（上海博物館蔵）のほか尺牘教通（台北・故宮博物院蔵）を見るのみである。伝は『明画録』巻六、『晚香堂小品』巻一七、『無声詩史』、『莫廷韓集』その他にみえる。

(502) 婁子柔 子柔は婁堅（一五五四—一六三一）の字。初名は孟堅、江蘇省嘉定の人。万曆四四年（一六一六）の歳貢生であるが、官途には就かなかつた。帰有光の同門である郷里の唐時升・程嘉燾とは親交が深かつたが、時人

に「練川三老」と称せられ、また李流芳を加えて「嘉定四先生」とも並称された。詩文に巧みで、著に『呉猷小草』一〇巻、『学古諸言』二五巻がある。書は自ら、若いころ草書を好み『淳化閣帖』『大観帖』の王羲之を学んだという（『呉猷小草』巻一〇）が、清初の王忞圭は、はじめ鍾繇・王羲之を学んだが、晩年は蘇軾を学び、それまでの柔媚の趣を一洗したという意のことをいっている（『柳南隨筆』巻六）。翁方綱もいのように伝世作は少ないが、手近かには「聖昭將読書石湖賦詩惜別」（白居易早発赴洞庭舟中作詩）（上海博物館蔵）、〈王縉詩〉（台北・故宮博物院蔵）がみられる。ただしこれらは翁方綱が下文に「晋法を追う者」というよりは、蘇軾の影響の方が強い。伝は『明史』巻二八八・唐時升伝附、『列朝詩集小伝』丁集下、『明詩綜』巻六五、『明詩紀事』庚四その他がある。

(503) 施愚山 愚山は施閻章（一六一八—一八三）の号。字は尚白、安徽省宣城の人。官は翰林院侍読学士に至つた。著に『愚山集』九六巻がある。書に關することは史伝類には記されていない。『皇清書史』中にあるかと思うが未見。伝は『清史稿』巻四八九、『清史稿』巻七〇、『碑伝集』巻四三、『国朝先生事略』巻二七、『国朝名臣言行録』巻三その他にみえる。

〔一二〕於唐求晉。虞歐其大宗矣。虞右軍之遺。歐大令之遺也。然而醴泉銘妙運隸體。則大令之法。羊薄以來。至醴泉而諧暢極矣。惟化度塔銘則率更神悟。直以右軍之内斂爲之。又不比永興之嗣傳風度。而於唐楷中獨存山陰斐几之意。此化度所以爲唐楷第一也。若褚則亦大令之遺。神完守固。初無一筆外散。而寶氏述書所評。乃謂澆漓後學者何耶。元遺山論東坡詩曰。金入洪爐不厭頻。精眞那計受纖塵。蘇門果有忠臣在。肯放坡詩百態新。又曰。奇外無奇更出奇。一波纔動萬波隨。只知詩到蘇黃盡。滄海橫流卻是誰。遺山之言滄海橫流。即寶息之言澆漓後學也。吾嘗謂。遺山不料後來尚有楊誠齋楊廉夫數輩人耳。寶尚鞏固不料有以雄冠劍佩來

聖門<sup>(51)</sup>。如米元章<sup>(52)</sup>者耳。唐代之詩。自錢劉十子以降。亦皆何嘗非效右丞<sup>(53)</sup>。右丞之眞詣<sup>(54)</sup>果有存焉否邪。唐代之書。亦皆效虞歐褚。而此間問津山陰<sup>(55)</sup>。又由大令問津。右軍之眞詣。果有存焉否邪。不得不舉寶氏論諸書爲上下。古今一大關捩矣。

唐において晋を求むるは、虞・歐その大宗なり。虞は右軍の遺、歐は大令の遺なり。然りしこうして《醴泉銘》の妙隸体を運らすは、則ち大令の法なり。羊・薄以来、醴泉に至りて諧暢極れり。惟だ《化度塔銘》は、則ち率更の神悟にして、直ちに右軍の内斂<sup>(56)</sup>をもつてこれをなす。又に永興の嗣伝せる風度に比せざれども、唐楷中においては、独り山陰斐几の意を存す。これ《化度》唐楷の第一たる所以なり。褚の若きは則ち亦た大令の遺なり。神完くして守ること固し。初めより一筆として外散するなし。しかれども寶氏の『述書』の評するところ、乃ち「澆漓後学」と謂うは何ぞや。元遺山 東坡を論ずるの詩に曰く、「金洪炉に入つて頰を厭わず。精真那ぞ計らん纖塵を受くるを。蘇門果して忠臣の在るあらん、肯て坡詩に放いて百態新たなり」と。又に曰く、「奇外奇なきも更に奇を出し、一波纔<sup>(57)</sup>に動きて万波随う。只だ知る詩は蘇・黄に到りて尽くるを、滄海横流却つて是れ誰ぞ」と。遺山の「滄海横さまに流る」と言うは、即ち寶息の「後学を澆漓す」と言うものなり。吾れかつて謂えらく、遺山は後來に尚お楊誠齋・楊廉夫数輩の人あるを料らざるのみと。寶尚輦は固より雄冠劍佩をもつてして聖門に来れる米元章のごとき者あるを料らざるのみ。唐代の詩、錢・

劉十子より以降、亦た皆に何ぞかつて右丞に效うものあらざらん。右丞の眞詣、果して焉れを存するものあるや否や。唐代の書も、亦たみな虞・歐・褚に效う。しかしてこの間津を山陰に問うもの、又に大令に由りて津を問うも、右軍の眞詣は、果して焉に存するあるや否や。寶氏、諸書を論じて上下をなすを挙げざるを得ず。古今の一大関捩なり。

(504) 隸体 ここではいわゆる隸書の意。註(17)参照。

(505) 羊薄 羊欣と薄紹之をさす。註(472)(473)前出。

(506) 化度塔銘 《化度寺邕禪寺舍利塔銘》をさす。註(45)前出。

(507) 内斂 あるいは内斂(内にひきしめる)の錯写か。ただし内斂と熟する用例も見かけない。あるいは前後の文意から推して、虞世南『筆髓論』積草篇の「管を懸けて鋒を聚め、柔毫もて外に拓き、左を外と為し、右を内と為す。起伏連卷、收攬吐納し、内に転じて鋒を蔵する也。云々」という「外拓」に対する「内転」の意で用いたものか。なお後考に俟ちたい。

(508) 斐几之意 註(476)前出。

(509) 澆漓後学 出典は寶息『述書賦』巻中の「河南(褚遂良)専精し、克く俛、克く勤む。告誓に服膺し、思いを鋭くし文を猗(うつく)くするも、恐らくは成る無きこと画虎の如く、将に效擧に類する有らんとす。価は衣冠を重くし、名は内外に高しと雖も、後学を澆漓す。而して罪無きを得ん乎」である。澆漓はここでは『漢書』黄霸伝の「淳を澆(うすく)し、撲を散す」に同じく、薄くする意で用いている。即ち寶息は、褚遂良は正しい王法において後輩を誤らせた、と非っているのである。

(510) 元遺山論集東坡詩 元遺山は金の元好問(一一九〇—一二五七)。以下の七絶は『遺山詩集』巻一一所収。ちなみに詩中の「蘇門」に註して「蘇門の諸君は一人として能く嫡派を継ぐ者無し。才の限る所有るは強う可からざる耳」という。

(511) 又曰 以下の七絶もまた『遺山詩集』巻一一所収。

(512) 楊誠齋 誠齋は南宋の楊万里(一一二七—一二〇六)の室号。字は廷秀、諡は文節。江西省吉水の人。紹興三四年(一一五四)の進士。太常博士より累進し、高宗から寧宗の四朝に仕え、館職・史官を歴任した間、朱熹ら六〇人の人材を推挙した。剛直な性格から政策に直言したことで次第に疎まれ、宝文館待制で致仕した。詩文に秀れ『誠齋集』一三二巻があり、黃庭堅の江西詩派の末流に位置し、南宋屈指の詩人として評価がある。伝は『宋史』巻四三三、『宋人軼事彙編』巻八四三。

(513) 楊廉夫 廉夫は元末明初の楊維禎(一二九六—一三三七)の字。号は鉄崖・鉄笛・東維子ほか。浙江省紹興の人。泰定四年(一三二七)の進士で、天台尹となり、のち江西儒学提挙に至ったが、元末の乱で官を捨て、ついに江蘇省松江に隱遁してこの地の文人と交わり、また各地の詩社を指導した。華陽巾をつけ羽衣を纏う仙人の風姿をするなど、常規を逸した奇癖の逸話も多いが、その詩は鉄崖体と呼ばれ、元末明初の大家として名を馳せた。著は『東維子集』三〇巻、『楊鉄崖古楽府』一〇巻その他がある。翁方綱はここで楊維禎を楊万里と並べ、その詩人としての才が蘇軾・黃庭堅を継ぐ者として挙げているのであるが、楊維禎はその清勁な書風の行草書において、元末野逸派の雄として書の歴史にも名があり、〈晩節堂詩帖〉(台北・故宮博物院蔵)、〈張氏通波阡表〉(日本・個人蔵)、〈真鏡庵募縁疏〉(上海博物館蔵)ほかがある。伝は『明史』巻二八五、『新元史』巻二三八、『楊鉄崖集』巻三(自伝)、『宋文憲公集』巻一〇(墓誌銘)、伏見冲敬「張拭城南詩卷」(『書品』一八九)ほかがある。

(514) 竇尚輦 尚輦は竇息(生歿年不詳)の官名。字は靈長、陝西省扶風の人。建中年間(七八〇—八三三)、范陽功曹、檢校刑部員外郎、宋汴節度參謀に官した。文才があり、ことに書画の鑑識に秀れ、また張芝・王羲之を学び、草書に精通したという。天宝年間(七四二—七五六)「大同賦」と「三殿蹴鞠賦」を献上し、時政を諷した。その碑誌・詩篇・賦頌・章表等十余万言に及んだというが、晩年の著述『述書賦』三巻が最も有名である。内容は周より唐に至る書人を時代順に配して論評し、また署証・印記・収蔵・閲玩・交易にまで及んだものであるが、駢麗体の修辭が難解である。ちなみに兄の蒙(生歿年不詳、字は子全)が『述書賦』に書人の伝記を註しているが、史料的价值

が高く、また巻末に附した「語例字格」は、評語理解のうえで重要な資料である。伝は徐浩『古蹟記』、『全唐文』巻四四七、『元和姓纂』巻九、『書小史』巻一〇、『書史会要』巻五。

(515) 雄冠劍佩來聖門 雄冠は「冠雄鷄」の略であろう。聖門は孔子の門をさす。この句は註(496)のそれと対応する。要するに米芾の書は力強く張りはあるが、洗練されていないとみるのが翁方綱の見解である。

(516) 米元章 元章は米芾の字。註(115)前出。

(517) 錢劉十子 錢は錢起(七二二—八〇三)、劉は劉禹錫(七二二—八四二)をさす。「十子」は「大歷十才子」のことで、中唐の大曆年間(七三六—七九)に傑出した韓翃・錢起・盧綸・吉中孚・司空曙・苗綽・崔峒・耿湋・夏侯審・李端を指し、『新唐書』巻三〇三(盧綸傳)、錢起はその代表格に挙げられるが、劉禹錫の名をみない。劉禹錫も元稹・白居易と並ぶ中唐の大詩人であるため、翁方綱の記憶ちがいで並称したものか。

(518) 右丞 盛唐の大詩人王維(七〇一—?—六)をさす。晩年の官名である尚書右丞により王右丞ともよばれる。

(519) 真詣 真髓ほどの意であるが、見かけない語である。

(520) 問津山陰 ここでは王羲之に書法をもとめる意。問津は、『論語』微子篇に「子路をして津を問わ使む」により、渡し場の所在を尋ねる意から転じ、学問の道を探めることをいう語。山陰は〈蘭亭序〉の「会稽山陰」の地で曲水の宴を催したこと、王羲之をさす。

(一三) 右軍正楷<sup>(521)</sup> 唐已稀絶。樂毅黃庭傳摹形似。去古漸遠。永興高秀。率更凝重。由堂入室<sup>(522)</sup>。二家兼之。夫風骨峻整<sup>(523)</sup>。則漸趨流利<sup>(524)</sup>。此山川融結勢所必至故。惟褚法上下該貫也。薛少保之菁華<sup>(525)</sup>。合以魏著作之腴厚<sup>(526)</sup>。而褚法備矣。然猶未到褚之正定結脈歐虞也。率更精力。直造未授官奴以前分際。此間從容緩步。韻味深永。蓋山陰得勢之祕妙。故在未變隸時。是以。吾於鄭郎中碑<sup>(529)</sup>。仰窺岐陽十鼓<sup>(530)</sup>。正不僅推金鄉七人<sup>(531)</sup>。下啓褚法耳。

右軍の正楷は、唐すでに稀絶たり。〈楽毅〉・〈黄庭〉は形似を伝摹し、古を去ること漸く遠し。永興の高秀、率更の凝重は、堂より室に入る。二家これを兼ねるも、夫の風骨峻整は、則ち漸く流利に趨く。これ山川融結の勢の必ず至るところなるが故なり。惟だ褚法のみ上下該貫せるなり。薛少保の菁華もて、合するに魏著作の腴厚をもつてして、褚法は備われり。然れどもなお未だ褚の正定は、欧・虞に結脈するを到さざるなり。率更の精力、直ちに未だ官奴に授からざる以前の分際に造り、この間從容として緩歩し、韻味深く永し。蓋し山陰勢を得るの秘妙は、故より未だ隸を変えざるの時に在り。是をもつて、吾鄭郎中碑において、岐陽の〈十鼓〉を仰窺す。正に僅かに金卿七人の、下褚法を啓くを推さざるのみ。

(521) 正楷 正書また楷書と同義。註(185)前出。

(522) 由堂入室 堂はいわば応接室に対して、室は奥の間をさし、入室は学問芸術の奥儀に達したことに譬える。ここでは『論語』先進篇の「子曰く、由や堂に升れり矣。未だ室に入らざる也」を踏まえたもの。

(523) 風骨峻整 風骨は人物評、文芸批評として六朝以来頻用される評語で、類似的概念としては風韻・風度・風尚・風神・風格などがあり、高尚で力強さを感じさせる意で用いる。峻整は厳そかで整齐なる意。『晋書』庾亮伝に「風格峻整、動もすれば礼節に由る」といい、また『宋史』朱京伝に「風神峻整、見る者之を憚る」の用例がある。

(524) 流利 ここでは筆勢の流暢さをいう。梁の庾元威『論書』に「(孔)敬通は又に一筆草書を能くす。一行一断、婉約流利」の用例がある。

(525) 薛少保 少保は太子少保の略で、ここでは薛稷をさす。註(339)前出。

(526) 魏著作 著作は著作郎の略で、唐の魏栖梧(生没年不詳)をさす。魏栖梧の伝記は一切不明である。ただ陳思『宝刻叢編』卷五〈文蕩律師塔碑〉に

「唐、前河南告成尉・盧奐、撰、著作郎・魏栖梧、書す。律師の姓は葉氏、河南密県の人なり。開元十三年十月、弟子の一智、之が為に塔を建て此の碑を立つ。陽翟県に在り」といい(歐陽棐『集古録目』卷六に同文を引く)、また趙明誠『金石録』卷五にも碑目をあげ「盧奐撰、魏栖梧正書。開元十三年十月」と記している。ただしその後の金石著録には見えない。碑は早くに亡佚し、また拓本も、三井聴冰閣が現蔵する李宗瀚旧蔵のいわゆる「臨川李氏本」の剪装本(有正書局影印本あり)しか伝わっていない。この孤拓は冒頭の題款に「大唐河南府陽翟縣善才寺文蕩律師塔碑銘」とあることから、この碑を最初に考証した王澐は、その『虚舟題跋』卷六に「唐魏栖梧善才寺碑」と標目して以後、「善才寺碑」の名で呼ばれることが多い。ところでこの孤拓本は、右の題款のあとに「范陽盧奐撰、河南褚遂良書」とあって『金石録』等の記録と合わない。が王澐は、孤拓本の「河南褚遂良書」は、後の好事家がこの拓を高く売るために、他の碑の褚遂良の款署を割裂してこの帖に嵌めたものだ、ということ論証した(前掲書)。翁方綱は李宗瀚にこの拓を見せられ、帖首に觀跋三首を入れ(『復初齋文集』卷二二「跋魏栖梧書善才寺碑三首」は、字句にままた異同はあるが、骨子は同じ)、また帖尾に題詩四首を記している。ちなみに翁方綱はその第三跋で、王澐が褚遂良の「雁塔聖教序」を評価する(『虚舟題跋』卷七「褚遂良雁塔聖教序」第三跋)に反対し、この善才寺碑を引合いにして、「王籟林、褚法を論じて云う、稍や縦逸なるは則ち魏栖梧為り。步趨に尺寸を失わざるは則ち薛稷為りと。所謂、縦逸とは即ち此の(善才寺)碑を指す也。蓋し唐の世の書家、褚を習う者最も多し。而して此れ尤も其の神理を得。然れども魏著作の此の碑は、其れ褚法に於て実に乃ち步趨に尺寸を失わず。薛少保の若きは、則ち加うるに妍華を以てす。寶泉の所謂『菁華却つて倍する』者也。褚の楷は自ら孟法師碑を以て第一と為し、房梁公碑は之に次ぐ。而して二碑の神理は、具さに此の碑に在り。其の格意は当に王行滿・王知敬の間に在るべし。善く褚を学ぶ者之を此の碑に求めば、餘師有らん矣」といい、褚蹟に孟法師を第一に推し、魏栖梧を褚の神理を会得したものとして薛稷より上位に据える。しかし清末の葉昌熾『語石』卷七には、この碑を「用筆過縱、英華尽く洩る」として「孟法師を去ること更に遠し」と評しているあたりが、まず当を得た見解で

あろう。なおついでにいえば、この孤拓本には翁方綱とは犬猿の仲だったらしい阮元が、翁の死の翌嘉慶二四年（一八一九）に記した観跋があって、阮元の南北書派に関わる見解を窺わせる内容であることなども珍しい。

(527) 正定 ここでは平正安定の意か。「一四」に「淵穆正定」とある。

(528) 官奴 王献之の幼名。註(50)前出の王羲之書《業教論》の末に「書して官奴に付す」の款記を入れたものがあり、また王羲之が王献之にあてた書翰《玉潤帖》（一名《官奴帖》）にも官奴の語がみえる。

(529) 鄭郎中碑 通称《鄭固碑》のこと。註(105)前出。

(530) 岐陽十鼓 註(1)前出《石鼓文》をさす。

(531) 金郷七人 金郷は金卿の錯写。《礼器碑》碑陰の最末行にみえる一句中の語をいう。註(204)前出。

〔一四〕山陰金卿曜奴等七人書禮器碑。(532) 此在禮器碑陰極邊際處。拓本多遺失之。故知者甚少。禮器碑在漢隸中。超妙神化之詣。更何待言。然學者知其超妙。而師其淳古。且勿學其變化也。近日王若林。推褚書學此碑。(533)

亦何嘗非隸法之間津乎。乃其意則以褚之雁塔聖教。學禮器碑之瘦勁。此論一開。即若林論篆取鐵線瘦細之意。(534) 以此示後學。正墮入寶賦(535)以後學之澆漓。歸咎於褚公矣。豈知。褚法非以輕虛筆不著紙爲高韻也。褚書淵穆正定。乃實晉法之遺矩。王若林晚年。自命學褚。不過小變。其學歐之方偏。(536) 運以輕逸之意。(537) 遂自謂學褚。(538) 如此是乃所謂澆漓後學者耳。其實褚公曷嘗澆漓後學哉。

「山陽の金卿曜奴等の七人」、礼器碑を書す。これ《礼器碑陰》の極めて辺際の処に在り。拓本 多くはこれを遺失す。故に知る者 甚だ少し。《礼器碑》は漢隸中に在りて、超妙 神化の詣なること、更に何ぞ言

うを待たん。然れども学ぶ者はその超妙を知り、しかしてその淳古を師とするも、且にその変化を学ぶこと勿らんとするなり。近日の王若林、褚書を推してこの碑を学ばんとするも、亦た何ぞかつて隸法の問津にあらざらんや。乃ちその意は則ち褚の《雁塔聖教》をもって、礼器碑の瘦勁を学べりとし、この論一たび開く。即ち若林 篆には鉄線の瘦細を取るの意を論ず。これをもって後学に示すは、正に寶賦の「後学を澆漓す」をもって、咎を褚公に帰すに墮入せしむ。豈に知らんや、褚法は軽虚の筆の紙に著かざるをもって高韻をなすにあらざるを。褚書の淵博正定は、乃ち実に晋法の遺矩なり。王若林は晩年に、自ら褚を学ぶと命づくも、小変せるに過ぎず。それ欧の方偏を学び、運らすに輕逸の意をもってし、遂に自ら褚を学ぶと謂う。かくのごとくんば、是れ乃ちいわゆる「澆漓後学」なるもののみ。その実かつて褚公曷ぞ「澆漓後学」ならんや。

(532) 礼器碑 註(105)前出。なお上句の「山陰、金郷」は「山陽金卿」の錯写。卷一三「二一」項の本文には「山陽金卿」と既述してある。

(533) 王若林推褚書学此碑 王澍『虚舟題跋』卷二「魯相韓勅孔廟碑」の長跋中の一節に「褚河南の雁塔聖教序は、全て此の（礼器）碑を法とし、竟に形神畢く肖る。云々」というのを指す。

(534) 若林論篆取鉄線瘦細之書 ここはたぶん『虚舟題跋』卷八「李陽沐縉雲城隍廟碑」の「篆書に三要有り。一に曰く圓、二に曰く瘦、三に曰く参差。圓は乃ち勁、瘦は乃ち腴、参差は乃ち整齐なり。三者は其の一を失わば奴書耳。（中略）縉雲・城隍廟碑は、尤も其の奇絶の作にして、運筆は蚕の糸を吐くが如く、骨力は豚もて鉄を裹むが如し。云々」をうけているのであろう。なお王澍は、篆書と直接しないが、雁塔聖教序を称揚して「宜なり、其の筆



法は瘦勁にして、鉄線もて縉(むす)び成るが如し。云々」ともいつている  
(前掲書卷七「褚遂良雁塔聖教序」)。

(535) 寶賦 寶息『述書賦』をさす。なお下句の「澆漓後学」は註(509)前出。

(536) 方偈 見かけない語であるが、ここは褒詞であるから、求心的できちんとした形をいうか。

(537) 輕逸 これまた用例を見ないが、輕妙とか輕快に近い語意である。

(538) 自謂学褚 『虚舟題跋』卷七「褚遂良雁塔聖教序」に、雁塔聖教序を極褒したのち「余は酷はだ褚の書を喜む。独り此の(雁塔聖教序)碑に於ては驚怖し、敢ては涉筆せず。春杪、將に里に還り上冢せんとし、意を悉して此の一本を臨し、之を携えて以て行き、遍く友朋に示すも、道を好む者無し。燕支の牡丹、古今 概きを同じうす矣。云々」というあたりを、翁方綱は頭においたものか。